

41799

教科書文庫

4
810
41-1923
2000071955

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

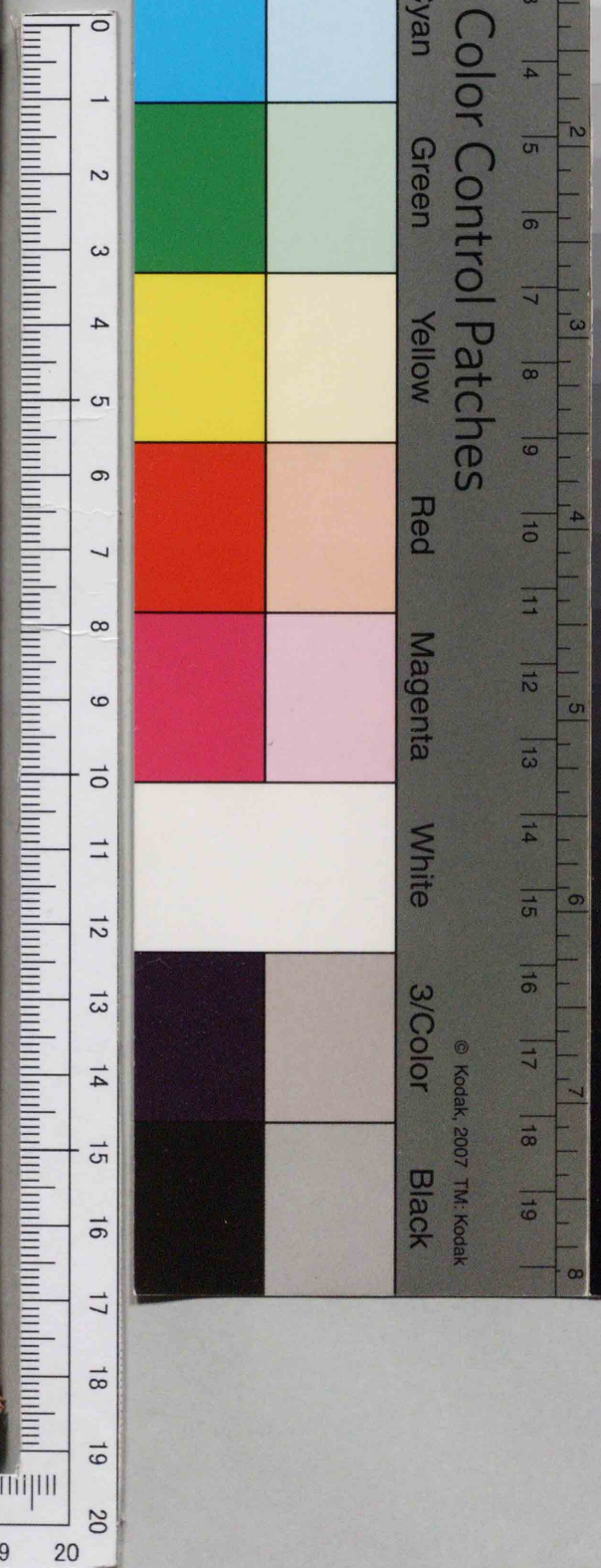


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
41-1923
2000071955

版五十正修
平彌田吉
編

學中
國文教科書卷二

京東
版藏館風尤



資料室

濟定檢管部文
書科教科語國校學中 日六十月一十年二十正大

教科書文庫

4

810

41-1923

2000071955

中國文教科書

吉田彌平編

東京 光風館藏版



広島大学図書

2000071955



4a
810
+12

中國文學教科書卷二

目次

一	金剛山	沼波瓊音	一頁
二	保津川下りその一	徳富健次郎	二
三	保津川下りその二	徳富健次郎	六
四	藤樹先生	橘南谿	〇
五	八道の山	大町桂月	六
六	渡鳥	吉江孤雁	〇
七	雀	北原白秋	〇

目次

八	公園の秋色……………	大和田建樹	三
九	エムデンその一……………		四
一〇	エムデンその二……………		四
一一	郷里の友に……………		五
一二	時 間……………		六
一三	金で買へぬもの……………		六
一四	大石良雄その一……………	山路愛山	六
一五	大石良雄その二……………	山路愛山	七
一六	牧場の曉……………	杉村廣太郎	八
一七	冬 景……………	徳富健次郎	八
一八	初日影……………	武島羽衣	七

一九	三浦路……………	川上眉山	九
二〇	硝子障子……………	正岡子規	九
二一	柿二つ……………	高濱虚子	九
二二	蒔かぬ種……………		一〇
二三	眞田幸村父子……………		一一
二四	浦潮より……………	太田覺眠	一九
二五	奉天占領の日その一……………	澁川玄耳	二五
二六	奉天占領の日その二……………	澁川玄耳	二五
二七	月雪花……………		二四
二八	春待つ心……………	相馬御風	二四
二九	千里の春その一……………	大和田建樹	二八

三〇 千里の春その二……………大和田建樹 一五

目次終

中學國文教科書卷二

一金剛山

沼波瓊音

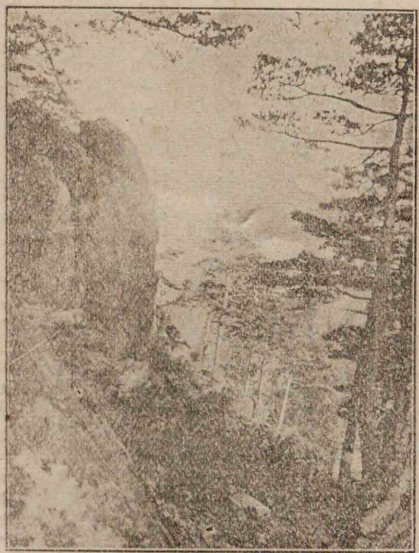
沼波瓊音
名ハ武夫
國文學者
俳人
明治十年生

内金剛の千山萬瀑はほゞその大概を観たり。これより外
金剛の奇勝を探らんとて出立つ。途に舟を雇ひ、大雨を冒
して海金剛の景を一瞥し、温井里ホテルに着く。この地は
温泉あり。故に里の名を温井といふ。客は多く西洋人な
り。この夜風雨益強し。
翌曉暴風雨の怖ろしき響に夢を破らる。二階なる洋人連

も起きたる様子にて、足音など聞ゆ。程なく風静まり、雨霽る。庭に出づるに、水晶峰に見ゆる瀑布、昨日よりその數を増したり。霽れは霽れたれど、溪流増水のため、今日一日は山まはり危しと鮮人等は云ひ居りと聞く。前なる野に出でて萩手折り來て瓶に挿し、雜誌を讀みなどす。米人の中に今日午後如何にもして萬物相に行くべしといひ居るものあり。行く者あらば我も共に行かんと思ふ。

午餐をすまして一同に出發す。温井川に至れば、水勢物凄く、皆岸に立ちて當惑の體なり。徒渉するもあり、チエヤにて渡るもあり。年老いたる米人はチエヤにて渡り、岸に着くや、兩手をあげて「ブラボー」と叫ぶ。さて三々五々山道を

進みゆく。路傍の石、灌木の様、庭園の趣あり。左に溪流あり、寒霞溪と云ふ。こちらの岸の山は萬物相よりの連脈に



金剛山寒霞溪

て、かなたの岸は觀音峰の連脈なり。觀音連脈、處々に瀑布懸り、その飛沫遠く飛んで快く我等の面を打つ。昨夜仆れたるらしき大木を攀ぢ

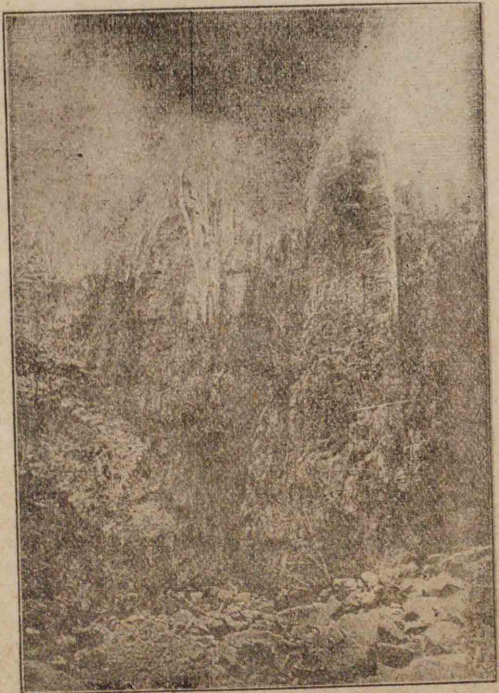
跨ぎ、危き流れをあちこち渡り、て爪先のぼりに進む。

顧みれば、日本海見ゆ。寒霞溪の岸を登る二時間、温井里を去つて一里二十町、右の路傍に三角柱に似たる大巖峰立て

り。是、萬物相の入口なり。その下に内地人の一亭あり、萬相亭と云ふ。我がこゝに至れる時、亭に一人も見えず。主婦に問へば、我より先に來りし邦人も洋人も、萬物相を見てなほ新萬物相まで見んとて、こゝに休む間もなく行けりと云ふ。時すでに遅れたれば、急ぎしなるべけれど、餘り先を争ひて、眼中同伴者なきを惡み、我があとより來る老米人と其の女とを待合せんと思ひしが、いかにも時すでに遅れければ、我もつひに主我風の心になりて、亭に憩はず、チエヤ昇きの鮮人の一人を案内者にして、我も必ず新萬物相まで行かんとして進む。

萬相亭の背後に至れば三仙巖あり。巖高さ幾十丈、鉾を並

べたる如く矗立す。殊に右の一巖尖端鋭くして蒼穹を刺さんとする勢あり。この邊より右に近く聳ゆる巖は悉く峰を成し、峰悉く奇峰ならざるはなく、奇峰物に似て各活けるが如く、巨神嘯き、巨佛醉ひ、巨仙舞ひ、青空爲に狭し。萬物相とは是なり。分ちて言へばこゝを舊萬物相と稱す。萬物相の名は音のひゞきと言ひ、意味と言ひ、偉を極め壯を



金剛山二仙巖

極め、よくこの奇峰聯立の狀を盡せりと言ふべし。金剛山の狀如何と問ふ人あらば、たゞ大聲に萬物相と答へん。我が踏む所は大溪谷にして、水石隨所に相打つ。遙に前方を望めば、この溪谷の峰壁にあひて窮らんとする邊、先んぜる人々の後姿小さく石に紛れて動き行く。我等も急ぎて水を踏み石を攀ちて行くこと八九町、左に密林のかげを、岩を階とし瀑を路として上れば、すでに新萬物相の界なり。岩を抱き樹の根に縋り、殆ど匍匐して登る。脚下に水聲絶えて、右方眼界開けをる處に至れば、そこにも奇峰脈をなして斜陽に輝くを見る。奥萬物相なり。なほ攀ちくくして天然の石門所謂金剛第一關をくゞらんとする時、さきの一行



金剛山玉女峰

の下り來るにあふ。人皆我をこゝまでは逆も來らじと思ひ居たりと大いに驚嘆す。「こゝよりは杖は邪魔なれば棄てよ」と云ふ。すなはち杖を岩根に残して第一關を潜れば、やがて身は玉女峰上にあり。上は碧空のみにて、巨巖の先端に近き僅かの凹みを傳ふなり。傳うて左し、足場

こゝに盡くる所、忽ち見る脚下に展開する光景の如何に雄大なるよ。幾千丈の巖壁縦に裂けて、無數の獨立峰をなし、花崗岩の純色雪の如く輝きて、織土を見ず。峰々其の相怪奇を越えて、皆莊重森嚴、萬物相と云へどもこゝに至りて萬物に比すべき無く、唯是聖巖靈峰、人をして拜跪せしむ。烈風寒くして暮靄遙かの下より徐ろに群峰を包まんとす。されど我等はなほこの嶺をめぐりて、玉女粧水を湛ふと云ふ壺がたの岩を俯瞰しなど峰上の眺めを盡して、さて全速力にて山を下る。瀑を踏んで溪谷に下り立ち、なほ日の光あるに安心して萬相亭に至る。亭より新萬物相に至る半里。されど道峻なれば往復三時間を要せり。亭にて少憩

し、さてチエヤに乗りて飛ぶが如く寒霞溪岸を下る。山間倒三角形に見ゆる日本海の暮光、麗しとも麗し。程無く日全く暮れて月出づ。溪に草に螢亂飛し、幽趣限なし。聲を出して歌つて曰く、

行きくれしことの嬉しさ、寒霞溪の

秋の螢のあはれを知りて。

瀧の上に半月出でてチエヤに乗る

我が影法師草むらを走る。

下りくゝて行く程に、途に人影あり、何者ぞと見れば、かの米人の父と女と數人の鮮人と共に路傍に蹲るなり。女我を見て「グッド、イヴニング」と挨拶す。如何にせしと父の方に

向へば、チエヤこはれたりと云ふ。歸りに萬相亭にてチエヤを雇ひしが、こゝにてこはれたりと見えたり。直るべきかと云へばもうぢきに直るところと云ふ。失禮して先へ行くに、ホテルよりボーイ二人、我等の歸り遅きを案じて提燈つけて迎ひに来るにあふ。かの米人の事を告げて進む。温井里ホテルの燈影見え来る。月下温井川を渡り、八時頃ホテルに歸り着く。我がチエヤ下るゝを待たず、米國の老夫人、外の二人はと問ふ。チエヤこはれの事を語る。これにて一同安心せり。やがて彼の二人迎の者と共に歸りたれば、食堂に集る。この日一日にて洋人も邦人も皆家族の如く親しくなれり。晚餐の時、洋人も大抵浴衣がけなり。

かの米老人の浴衣姿殊にをかしとて皆笑ふ。(鮮満風物記)

二 保津川下り その一 德富健次郎

午後二時近く龜岡で下車。いよゝ保津川を下るべく、すぐ車で保津の乗船場に赴く。幸にも夜來の雨は止んで、時雨を含んだ雲の間から折々薄日を漏らして居る。やがて川端の乗船場に來た。水面半町餘、さゝ濁つた保津川が瀬の音を立てつゝ、さつくと奔つて居る。それを前に、小さな家が二三軒、皂莢樹の老木が二本、乾からびた葉を寒い川風に鳴らして居る。下手に橋がかゝつて、向ふには山に倚つて高低した村がある。保津村であらう。丹波の山國も

保津川
桂川ノ上流
丹波國南桑田郡
龜岡町カラ山城
國葛野郡嵯峨村
ニ出ル山谷三里
間ノ急流
德富健次郎
號ハ蘆花
文學者
明治元年生

このあたりは打開けて、美しく色づいた山々が長閑に眼界を造つてゐる。乗船切符賣場で切符を買ひ、舟の支度の整ふ間、茶店に憩ふ。丹波名物の桑酒、酒は飲まぬが、瓢形の容器の面白さに一つ手頃なのを買ひ、舟中の料に大きな柿などを買ふ。

用意が出来たとの知らせに、一同橋の下手に下りて川舟に乗込む。兩舷の高い薄板の舟である。皆は薄縁の上に敷いた赤毛布に坐り、余は椅子に腰をかけた。船頭は前後に各一人、中程に一人皆頬冠して草鞋ばき、前後は棹と櫂で舵をとり、中のは櫂で漕ぐのである。

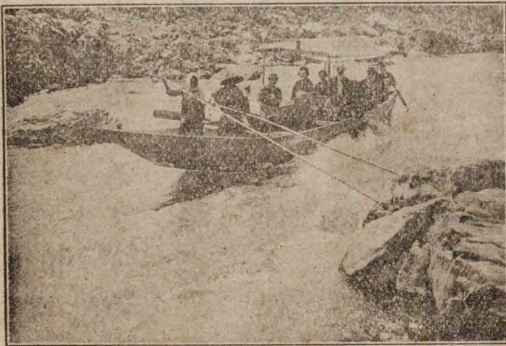
橋杭に繋がれた纜が解かるゝを待ちかねて、舟はするゝ

と流れ出した。夜來の雨に水が増して、流はなかく、急である。乗船場の茶屋も保津村も見ると、あとじさつて行く。忽ちくの字に川は大曲りする。勢に乗つて下つた舟は突きかける様にして、ばたりと東の崖下に止つた。深さうな水が小さな渦や色々の波文を縮らして居る。地藏淵といふさうな。と見ると人家の巢くふ高い崖の上から、電光形の嶮しい坂を、頬冠して腰蓑を着け、櫂を肩に、辨當箱ぶら下げた男が下りて来る。

「忠兵衛さん」と舟の中から前舵の船頭が聲をかける。頬冠の中から薄ら髭のにこゝした四十男が見おろして、何かいふ。忠兵衛さんはやがて股引草鞋の足をひらりと舟に

乗込んで、中程の座に櫂を立てた。それで船頭が四人揃ったのである。

南丹波の打開けた谷が後じさると、舟は漸く山と山との峽に入った。流が急になる。舟は矢を射る如く駛る。長い棹を取った一人は船頭に眼をくばり、一人は船尾に舵をとり、忠兵衛さん外一名は中間に兩舷



保津川附近圖
保津川舟下り

に分れて始終漕ぐ。併し漕ぐ要はない程舟脚は疾い。夜來の雨は保津川を膨らして好奇の客に期待以上の壯快を味はせるのであつた。東の崖上にある請田神社の祠を彼よくと指さし過ぎて、小鮎が瀧大坪大高瀬獅子が口と、段々面白くなつて行く。

峽は愈狭くなつて、水は焦ちに焦ち出した。大きな岩を衝き、小さな岩を跳り越え、白泡立て、勢猛に跑けていく。其の水にさも無邪氣にふわりと舟は乗つて、つるつるするすゝると無造作に飛んで行く、面白さうに飛んで行く。椅子にかけて見て居ると、緩勾配の瀑布をのべつに連ねたやうな水の坂が行手に見える。ぶつかつたら舟を微塵に碎くに

きまつて居るやうな岩が眞中にのさばり返つて居る。水と水とこぐらかつて、泡を噛んで眞白に煮えたぎつて居る處がある。冷やりとする。何處をどうして通つて行くかと心配する。船頭騒がず、舟は何處までも無邪氣に、つと其の勢に乗つて、さ、さ、さつと逆落しに、たりおりる。滑らかなものだ。少しのあぶなげもない。そんな平凡な處だつたかとふりかへつて見ると、今過ぎた瀬は後に白い階段を押立て、居る。よくもあんな處を無事に下つて來たものだと思ふ。

三 保津川下り その二

徳富健次郎

兩岸の山々は程よく色づき、杉や松の翠と美しい色の配合を見せて、舟を迎へては送るのである。忽ち峽の内が小暗くなつた。さあと時雨が降つて來た。傘翳す暇もないので、赤毛布を打ちかぶつた。色づく山から斜に落來る筋を見せて、さと川瀬を撲つ時雨の面白さ。「降れ、もつと降れ。」と、灘す間に、搔消す如く時雨は過ぎた。舟はもう三里も下つて、丹波から山城に入つて走つて居るのである。柔かな京の附近にこんな壯快が潜んで居るのは不思議といつてよい。肥後の球磨川に果さなかつた川下りの遺憾は、こゝで償はれた。一行は段々危険に馴れて、何でもかでも瀬、瀬、瀬でなければ面白くなつた。少し水勢がの

んびりして忠兵衛さんの櫂の漕ぎばえがする様な處へ來ると、言ひ合した様にあくびが出る。　どうくくくといふ響に頭を上げると、西の崖の上高く汽車が走つて居る。追瀬が稀に、流が緩くなつた。もう嵐山も遠くあるまいと思ふと、舟路の短いのが惜しくてならぬ。

やがて清瀧川の落合に來た。細い川が東から落ちて來る。兩崖から差出た支柱で支へた木橋が架つて居る。小さな路が山を上つて居る。「此處でよく寫眞を撮らはりまつせ」と船頭の一人がいふ。余も寫眞師の眞似をする。此の川は高尾、榎尾、槇尾の紅葉を浮べ、清瀧の里を過ぎて流れて來る。此處を東北に溯ると、清瀧に出るのだ。鐵橋を潜つて



千鳥が淵

大悲閣の下を過ぎ、千鳥が淵を通つて嵐山三軒家の下に舟は着いた。今夜は泊つて明朝舟を曳いて保津へ歸るといふ船頭たちを搞つて舟から上る。渡月橋に近い茶屋に腰かけて、茶を飲み餅を喫しつゝ、嵐山を眺める。日はもう入つたが、黄昏近い薄明に、もう五六分染めた嵐山の明るさが、空にも水にも

橋南谿
宮川春暉
伊勢ノ醫師

文化二年(三三三)
歿
年五十三

熊澤先生

酒稱次郎八
號ハ蕃山

關山藩ニ仕ヘタ
元祿四年(三三三)
歿

年七十三

藤樹先生

中江與右衛門
名ハ原

近江ノ儒者
慶安元年(三三六)
歿

年四十一

映つて居る。柔かな線、落ちついた色彩のどうしても畫である山の美しさよ。其の明るさを流しもあへず、永久に傍うて流るゝもとの保津川、今は名を變へて大堰川、またの名桂川の美しさよ。

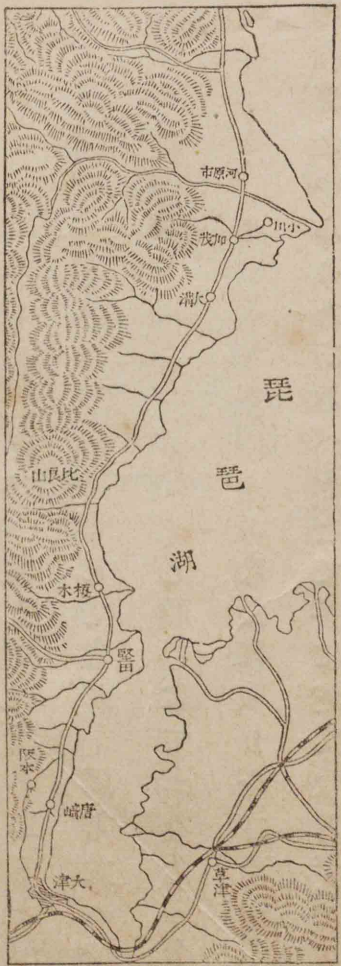
此の水、此の山、京ならでは所詮得られぬ。(死の蔭に)

藤樹先生

橋南谿

熊澤先生は藤樹先生の門人なり。此の人の藤樹先生に従はれし始を尋ぬるに、その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊る。馬方、河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解き

しに、鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそ。



琵琶湖近近圖

と思へば、そのまゝ榎木に走り行きて、飛脚の宿れる宿に到り對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、其の金を取出して返しけり。

飛脚は死したる者の蘇りたるこゝちして、喜のあまり、行李

より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、もし此の二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に到らん。さればその恩なかく、言葉のいひ盡すべき



(藏院書樹藤) 樹藤江中

にあらねども、まづ當座の御禮までに贈り奉る。と涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚きし顔色にて、そなたの金をそなたに取りをさめ給ふに何

の禮ごといふことあるべき。とて手にだに取らず。色々にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故已むことを得ず十兩と減じ、五兩となし、三兩となし、段々減

じて、終には金二步となし、せめてこればかりは我が心の悦なれば、受け給ふべし。さなくては、我が心も濟み申さず、今宵も寐ね難し。と、理を盡し詞を盡していふにぞ、此の金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにも謝禮を受くるは我が心にあらざさりとして餘儀なくのたまへば、さらば、鳥目二百文を賜はるべし。これは、今夜休むべき處をこれまで追ひかけ來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば申し請くべし。といひて、二百文にて酒を買ひて其の人に振舞ひ、我も酔ふほど飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人にてお

はすると問ふに「名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に小川村といふ處あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行きて聞き侍りしに、親には孝を盡すべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理・非道は行ふべからず。」などいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、我が物に非ざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり。」といひすて、歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、「さてもこの度は辛き命生きのびて、各方にも對面することゝなりぬ。」とて、ありし次第を委しく語りけり。折節其の家の裏に熊澤

次郎八、田舎より上り居て學問修業最中なりしが、此の物語を聞きて、「其の人こそ誠の儒といふものなれ。」とて、其の翌日すぐに江州に至りて、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、「人に教へ申すべき程の學徳なし。」とて更に隨從を許し給はず。熊澤只管に願ひて、二日が間藤樹の門に佇みて歸らず。藤樹の老母之を氣の毒がり、「とにかくに、まづ内に入れ申せよ。」とありし故、いなみ難くて内に入れ、終に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、藤樹を備前より招きたまひしに、その身は病身なりとて固く辭し、「門人熊澤といふものあり、御役にも立つべきものなり。」とて熊澤を出されけり。いづれも格別のことな

り。(東遊記)

大町桂月
名ハ芳衛
國文學者
明治二年生

五 八道の山

大町桂月

八道の山よ、いざさらば。
年の七年戈執りて
踏荒したる日の本の
益荒雄は今歸るなり。
釜山の浦の秋ふけて
空もしぐるゝ夕間暮
波路遙に帆を揚げて
汝と今や別るなり。

知遇の恩に身を捨て、
四百餘州をわが駒の
蹄に蹴んと勇みしも、
覺めてはかなき夢なれや。
我を知りにし太閤の
世になき後は、誰が爲に
千里の外に戈執りて、
異境の山にいくさせん。
恥をしのびて故郷に
歸るも、後に死ななため。
主君の家の行末を

思へば重き命なり。

あはれ太閤世を去りて、

よつぎの主は幼し。

石田・小西の小人ばら

かならず事を誤らん。

わが幼時よりはぐくまれ、

恵にあみし豊臣の

家を護りて死なん身の、

永くは住まじ世の中に。

跡に見捨つる益荒雄の

亡き魂、若しも知るあらば、

三途の川や六道の

辻にしばらく我を待て、

是を限の見をさめに

今一度と見返れば、

波音すぐく雨荒れて、

野山は霧に朧なり。

八道の山よ、いざさらば、

國の譽とたゝかひて

花と散りにし日の本の

男子の骨を護れよや。(黄菊白菊)

吉江孤雁

名ハ橋松

文學者

明治十三年生

六 渡 鳥

吉江孤雁

十月の下旬からかけて十一月の中旬まで、渡鳥の群が東京の空の上を騒いで過ぐる事がる。

曇り日の夕方、或は雨の少し降る日など、牛込、小石川邊の高臺の森の上に、幾百ともなく群鳥が喧しい音をたて、舞ひ狂つてゐるのである。赤城神社の杜、築土八幡の杜などは、此等の鳥の群集する場所となつてゐる。

夕方が最も好い、少し小高い見渡しのきく丘へ登つて西の方を眺めやつて見たまへ。幾十の群鳥が輪をゑがき、線と伸び、昇りつ降りつ、一團の黑影と密集するかと思ふと、忽ち散つて、萬片の木の葉の空に舞ふ如く、曇つた空の灰色の雲

赤城神社

築土八幡

共ニ東京市牛込

區ノ高臺ニアル

社

を背景にして様々な行動をしてゐるのである。或時は又

杜の中の一本高い樅の樹の枝に二三羽の鳥が止つてゐると、其の周圍を幾百の渡鳥が群を爲して隙間も無く攻寄せる。或は遠く取巻き、或は近く迫り、其の羽叩きと鳴聲とで鳥を威嚇してゐる。鳥は逃げ損じた武夫の如く、攻圍軍に攻立てられて、懸命になつて枝に取縋つてゐるばかり、翼を戦めて、鳴聲すら立て得ない。

此等の渡鳥は嵐に吹きまくられてか、木の葉に包まれてか、一群又一群と都の空から消えて行つて了ふ。そして十一月の下旬になると大方其の姿も止めない。あゝ長驅懸軍、彼等は何處を指して行くのであらう。彼等

の行く處、木の葉は空に飛び、彼等の過ぐる時、嵐は後方から追掛けて来る。雲に包まれ、嵐に撃たれても、行くべき方まで行かなければ止まない。一團々々、群れつ散りつ次第、次第に空を掠めて過ぐる。暫し立ちどまつて、其の行方を目送したまへ、海に陸に一隊又一隊、遙かに遠くイエルサレムの聖地へ向つて出發した十字軍の姿を思ひ、浮べずにはゐられまい。

或夕方、私は戸山の原へ出て、草の深く茂つた丘の上へ登り、入日の後の鈍色の雲を眺めて立つてゐた。すると不意にけたましい音を立て、空を鳴きつれて行くものがある。驚いて見上げると、幾百かの群鳥が一團となつて、空も黒く

なるばかりに連つて行くのであつた。それも私の立つてゐる丘から、さまで隔らない空の上であるから、羽音まで明かに聞えて怖ろしい位であつた。が、ふと氣がつくと、私が立つてゐる叢の中へ、何か空からぼたんと落ちたものがある。草を分けて見ると、紅の木の實が一つ落ちてゐた。今過ぎて行つた渡鳥が何處かの杜から啄んで來たものを、誤つて此の草原へ落したのかと思ふと、「はぐれたる木の實よ、漂泊の鳥の翼に乗つて、何處の森より來りしぞ」と問うて見たいやうな氣がした。其の實を拾つて、鳥の行く方を見ると、もう其の影は次第々々に幽かになつて、入日の雲が微かに明るい地平線下に没してしまつた。

其の渡鳥が過ぎた翌日であつた。夕嵐が烈しく起つて原を吹き、枯草を飛ばし、僅に残つてゐた木の葉をもぎちぎり、雲の中から霞がたばしつて來た。「もう秋の終り、今日よりは冬の領分ぞ」といふやうに感ぜられた。私は一人、嵐に吹かれながら野路を辿つて行つた。黍殻の束ねたのが吹飛ばされ、取残された唐黍が赤く畑に漂されてゐた。昨日の丘へ登つて見たが、只荒涼。灰色の雲が見る／＼空の上にひろがつて來る。

あゝ愈冬になつたのか。 (緑の國)

七雀

北原白秋

北原白秋
名ハ陸吉
文學者
詩人
明治十八年生

かういふ雀がゐました。一羽でした。それが熟しきつた陸稻の穂に、その横から飛びつきました。さうして其の儘前向きにその穂先に縋りつくつと、重みでその穂が次第に撓んで來ます。そこでその穂と一緒にじんわりと雀が下つて來ます。するといよいよその穂が垂れて、尻尾が地に着きさうになると、つつと離して、自分はまた羽ばたきして、宙で大喜びです。また穂先に縋りついて下つて來ると、また前のやうにつつと離す。これをたゞ獨りで、いつまでも／＼やつてゐるのでした。まるで子供です。

これも前のと似てゐます。雀が一羽孟宗のほづえに留つてゐました。雀はほづえの笹葉と一緒に揺れてゐました。風があつたのです。見てみると、孟宗竹が上半身から全部に大きく緩やかに揺れてゐたが、風が強くと出たらしく、その竹が雀のゐる上から、次第に斜に傾いて来る。それでも雀は飛離れずに、辛抱のしきれるだけしがみついてじつとしてゐる。その内に愈、身體が枝と垂直にづら下つて了つて、もうどうにもならなくなると、やつと枝を離して、宙で羽ばたきしながら、ちゅつちゅつ、ちゅ〜です。可なり辛抱強い遊びです、これなどは。

葛飾ノ家
東京府南葛飾郡
小岩村ノ寓居

ところで、をかしくてかはいゝのは、葛飾の家の古池に水浴びをしてゐた雀でした。それは鴉の行水するのを見てゐて、ついたまらなくなつたのです。鴉がちやぶ〜と綺麗な水玉を跳ね散すと、雀も二三羽、向ふの稗草のかけでばちや〜です。暑い日で、眞夏の静かな光を頭からかぶつて、をかしさうにちよつと水に翼をつけてばちや〜です。まるで子供が水鉄砲でも弾くやうに、眩しさに頭を振り〜でした。冬になつて、その古池に厚い氷が張りつめた。或朝、何氣なく見てゐると、雀が一羽、羽ばたきそこねて、氷の上に落ちると、そのまゝする〜と泣きました。これは面白いといふ

ので、また翼をひろげて小さな二つの脚で小意氣に身を反らすと、するくくくです。と、よろけさうになつて、慌て、縁の枯つ葉の眞菰に縋りついて了ひました。ちゆつちゆ

するとまた外のが、それを見てちゆつちゆ、頭を前にうつぶけたなり、するりとやると、這つて轉んで了ひました。

今度はまた三番目のがするくくとやると、三足目でするりとなつて、尻餅をついて了ひました。ちゆつちゆ。

それから三羽の雀はもう嬉しくて、たまりません。代り番ここに夢中になつてするくくく。

そのかはいかつた事といつたらありません。

かういふ雀が集つたら、何か事あれかしで、ちゆつちゆ騒いでゐます。

時とすると大勢が廂に出て、一羽が電線の上で綱わたりでもやらかすと、もう大喜びで、やんやんくです。

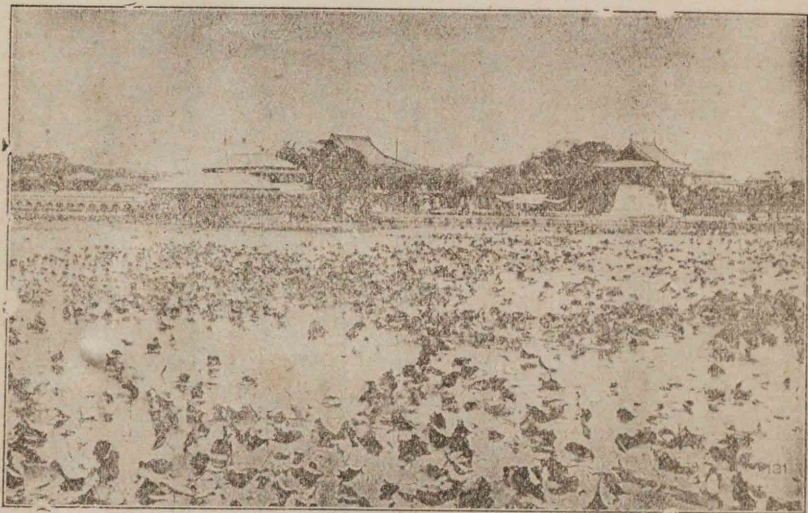
雀はまつたく面白がりやの、お調子乗りの、ふざけずきで、喜び出したら無性にうれしがつて、もう一切合切無我夢中です。(雀の生活)

八 公園の秋色

大和田建樹

汽車を待つ間に散歩せんとて上野の岡に上れば、公園の秋色正に闌なり。

大和田建樹
國文學者
歌人
明治四十三年
年五十四



上野公園の不忍池

昨夜の霜は公孫樹を染め
盡して梢に満ち、今曉の嵐
は之を伴ひて地に落せり。
彰義隊の墓の前櫻雲臺の
屋の後、人は竹箒取りてあ
ちらへこちらへと搔寄せ
んとするを、風はまた狂じ
來りて之を弄ぶ。梢を横
ぎりて上に立ち、餌を求め
かねて屋根に飛びのぼる
雀、また秋色畫中のものな

り。

清水の欄干に凭れば、岸に立ち並ぶ紅葉花の如し。參詣の
婦女もなければ、散策の學生も見えず。木の間を隔て、は
池水の朝日にきらめき渡るを見る。
半ば黄に、半ば紅に色づく木々の間に立てるは大佛なり、之
を左にして、雲に入り天に映ずるは東照宮の鳥居を護れる
梢なり。鳥居を入れれば、立ち並ぶ石燈籠の苔も自ら秋の色
を見す。朝のつとめは已に終りしと見え、社頭いと静かな
るに、裏の鳥居へと下り行く下駄の音、獨り木魂に響く。
白雲深き處に春を賞せしは此處なりき、紅露散る邊に涼を
追ひしは彼處なりき。今や水寒く、草朽ちて、僅に蓮の莖の

み残り。鴨は木の葉の如く亂れて來り、雪の塊の如く集りて浮ぶ。

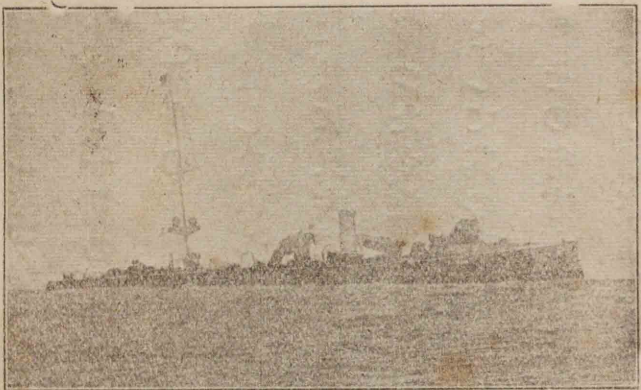
上野の鐘は七時を報ぜり。時は漸く來らんとす。山を越えて再び停車場に向ふに、朝日は今ぞ光をひろげて遠近の森に映じ、寺の塔にかゞやく。

白く立つ煙、黒く飛ぶ鳥。見渡せば、秋はまた都の空にも宿りかつ遊ぶ。(雪月花)

九 エムデン その一

歐洲戦争の初期に當つて、極東から印度洋に廻航した獨逸の巡洋艦エムデンは洋上の一孤島に巢くつて、ひどく航行

の敵國商船を惱ました。僅か數週間の中に、英國の商船十



エムデン

九艘、日本の商船一艘、都合二十艘の商船が、或は捕獲せられ、或は撃沈せられ、その犠牲となつて散々な目に逢つた。續いて九月二日に、マドラス港の砲撃には、同地の大油槽を焼き拂ひ、十月二十八日には露國の巡洋艦ジエムチャツグと佛國の驅逐艦ムユクとをも撃沈した。英國が商業上に被つた損害は實に四千萬圓に及んだ。これが爲にエムデンの

名は、一時海の魔物として恐れられてゐた。艦長カル、フォン、ミュラーは大膽で、細心で、そして敏捷で、沈着で、一點の批の打ち處もない好武官であつた。殊に彼が渾身の愛國心に至つては、如何なる武人も及ばぬ所がありはしまいかと思はれるほどであつた。敵國の商船の前に、後に、又右に、左に、突如として出現する彼の艦體は、天から降つたか、波から涌いたか、その出て來た處が分らぬ。忽焉として其の姿を沒した時は、霧に化したか、煙になつたか、皆目その行方が分らぬ。そして捕獲した商船や撃沈すべき商船の船客、乗組員などに對しては、此の上もない禮儀を盡し、すべて丁寧に取り扱ふことを例としてゐる。之を旁若無

十一月
大正三年



イラユミ、ンオフ、イルカ

人を陸兵の振舞に比べると、全く雲泥の差で、憎惡を受けながら、一方に讚嘆の聲を絶たないのは、全く艦長ミュラーの特性を明かに表示してゐるものである。併し此の好艦長も怪艦も何時かは破滅の時が來なければならぬ。エムデンがスマトラの正南に當るコ、ス島に現はれたのは十一月五日の午前六時であつた。その目的は、同島に設けてある無線電信及び海底電信所の機械装置を破壊するため、豫て手筈の定めてある通り、船が電信所の沖合に碇泊するや否や短艇をおろして、四

十三人の將校兵卒を上陸させた。敏捷は彼等の特技で、總べて事を瞬く中に取運んだ。が、短艇のまだ海岸に着かない内に、電信所では早くも海底線を利用してエムデン襲來の電報をシンガポール宛に打ち、又無線電信を利用して同一の電報を近海遊弋の諸艦に發した。恰も好し、此の報が百哩以内に航行中の巡洋艦メルボルン及びシドニーの無線電信機に通じた。此の二艦は濠洲から歐洲に向けて派遣された陸軍運送船の護衛艦であつたが、此の通報を得るや否や、シドニー號は全速力を以てコ、ス島へ急航すべき命令を受けた。

エムデンとシドニーとが互に煙突の煙を認めあつたのは、それから三時間の後、即ち九時少し過ぎであつた。敵艦と知つたエムデンは、上陸隊を收容する間もなくシドニー目掛けて進んでいつた。刻一刻間近くなつて、それがシドニーであること確認された時に、エムデン艦長は多大の失望を感じた。なぜかといへば、シドニーはエムデンに比べると艦體が大きく、速力が早く、且艦型が新式であるばかりでなく、兩舷に百封度彈を發射すべき六吋砲五門宛を備へてゐるのに、エムデンは纔に三十五封度半の彈丸を發射すべき四吋砲五門宛を備へるに過ぎなかつたからである。九時四十分には火蓋は先づエムデンから切つて落された。最初の第一彈で敵艦の要所を射貫き、その自由を奪ふ計畫

であつたらうが、事志と違つて、却てシドニーから酬いられた射弾のために前方の煙突を打折られ、自ら航行の不自由を感じるこゝとなつた。遠攻に失敗したエムデンはその近攻に於て一舉に成功を収めようと思ひ、旋回戦にうつるや否や、彼が特有の水雷發射を試みたが、此の時遅く、彼の時早く、シドニーの射弾は中甲板を打抜いて、既に艦内に火災を起してゐた。續いて命中した數發の榴弾はマストの後に炸裂して、いやが上に火災の火の手を揚げ、黒煙はとぐろをまいて天に上つてゐた。エムデンは焼けながらも絶えず攻勢に出で、敵に向つて旋回運動をしかけてゐたが、其の後の射弾にトップマストを射おとされたので、今はこれ

までと、針路を北にとつて航走を企てた。シドニーはさほどの損傷もないので、直に追撃はしたが、あまり近接すると、彼の奥の手なる例の巧妙な水雷發射を受けるので、即かず離れず、一定の距離を保ちつゝ、地平線外に隠れては現れ、現れては又隠れしてゐた。戦鬪開始以來既に數時間を経過したこゝと、損傷の甚だしいエムデンには、最早此の上の航走力はない。今を最期と覺悟したエムデン艦長は、船體の撃沈を惜んで、わざと北キーリング島の淺瀬に乗揚げて擱坐させてしまつた。

一〇 エムデン その二

シドニー艦長グロソップも亦善戦の士であつた。エムデンが既に坐礁して最早心を勞するに足らぬと見るや、折柄沖に現れた新來の一船に向つて航行を始めた。近づいて見れば是ぞ元の英國の石炭輸送船パーレスクで、曩にエムデンに捕獲され、現にエムデンの爲に諸種の補給をしてゐるものであつた。何事も知らなかつたパーレスクは、近く艦をエムデンと思ひきや、敵のシドニーであつたので非常に驚いたが、素より戦備がないので、直に降伏はしたものの、降伏に臨んで乗組員が艦底嘴を開き破つておいたから、見る／＼波は船體を没し、遂に沈没してしまつた。シドニーはパーレスクの乗組員を艦中に移し、再びエムデ

ンの坐礁した場所に戻つて來た。するとエムデンは、船體が傾き、煙突が折れて、あはれ果敢ない有様であるにも拘らず、なほ依然として檣頭に獨逸の艦旗を掲げ、まだ敗戦を自認しないやうな面憎い振舞をしてゐた。そこでシドニー艦長グロソップは信號手に命じて、

「貴下は降伏を欲するか。」

といふ信號を發せしめた。するとエムデン艦長ミュラーは、モールス符號で、

「それは何の信號ですか。當方には信號書が無いからお答するわけには參らぬ。」

と答信させた。いま／＼しいとは思つたが、眞偽何れにせ

よ、信號書がないとあつては問答にならぬ。そこで、グロソ
ップ大佐も亦モールス符號で、

「貴下は降伏するか。」

と發信しかへたが、一向答信がないので、つゞいて、

「貴下は余の信號をお受けでしたか。」

と問うても何等の答信をも送らなかつた。要領を得るに
苦しんだグロソップ大佐は曩にパーレスクから收容した
獨逸將校の高級者二三を呼んで、答信のない理由を糺すと、
三人とも異口同音に、

「艦長は決して降伏するやうな人ではありませぬ。答信
のないのは、機械的の故障ではなくて、艦長の心を表明し

たものでせう。」

と申し立てたから、よし、然らばかうするだけだ。と、午後四時
三十分を期して再び砲門を開いた。坐礁してゐる目標を
撃つたのだから、百發百中、たゞ一發の虚彈さへもない。流
石のミユラーも之には閉口したらしい。シドニーではエ
ムデン檣頭の艦旗が白旗にかはつたのを見て、直に砲撃を
停止し、艦長以下を捕虜として之を濠洲に送つた。エムデ
ン艦長の英名は敵味方の間に響いてゐるから、ミユラーが
濠洲へ到着の上は、一般公衆の歓迎を受けるだらうとの評
判であつた。

此の時の戦、シドニーの損害が死傷合せて十六人なるに對

して、エムデンの方では、戦死將校七名、下士卒百八名、シドニ
ーに收容された者が二百十一名、その中五十二名は負傷者
四名は致命傷を蒙つた重傷者であつた。エムデンに取つ

て如何に苦戦であつたかは、之
によつて察せられる。



中尉 ユック

さて無線電信所破壊のために
上陸したエムデンの一隊は、ミ
ユック中尉引率の下に直に電

信機の破壊に着手した。然るに突然本艦から仕事を早め
よ。との信號があつて、續いて汽笛があわたゞしく響いたか
ら、破壊作業がすむと同時に棧橋まで馳せ歸つて見ると、歸

艦せよ。との信號旗が掲げられてゐた。そこで一隊は取る
ものも取り敢へずボートに飛び乗つたが、此の時エムデン
艦上のトップ旗は既に捲きおろされ、斜桁旗が高く掲げら
れてゐた。上陸隊のボートが岸を離れた頃には敵味方と
も既に砲撃を交へて、龍蛇のやうな水煙は雲に通ずるか
疑はれるばかり、彼方此方に巻き上つてゐた。一隊の歸艦
を待つに暇なく黒煙をはきつゝ、航走し始めたエムデンを
見送つた一同は、親に離れた雛鳥のやうに、一時は呆然とし
て、爲す業を知らなかつた。到底歸艦の見込のないことを
知つたミュッケ中尉は、艇首を回して再び上陸し、獨逸の國
旗を掲げてコ、ス島に戒嚴令を布き、總べての武器を押收

し、携帯して來た四艇の機關銃を海岸に据ゑつけて敵の上陸に備へた。

かくて陸上の設備の終つた後、ミユツケ中尉は海戦の模様如何にと、小高い處に登つて觀てゐたが、形勢は刻一刻とエムデンに利あらず、終に其の艦影を見失つた。中尉は最早本艦と運命を共にする機會のないことを見て取り、敵の上陸を始めぬ間に此の島を立ち去らうと決心してあちこち見渡すと、港内に一艘のアイエシヤといふ三檣船があつた。これ幸と、早速それに飛乗つた。島主でもあり又船の持主であるミステル、ロースが船底に損傷のあることを告げたけれども、毫もこれを意とせず、直に八週間の食料と四週間

分の水とを積込んで、新に獨逸國旗を掲げ、闇に紛れて出帆した。それより幾多の危険を冒してアラビヤの海岸に上陸し、無事に本國に歸つた。(歐洲戰爭忠勇美談)

一一 郷里の友に

秋の天大かうきうなりたるが、お愛らさず
も、勉強だりうね、僕も例の通より働き
し、お遊ぶさま、我もさりて、なすそのせ
る、お體重も、さすも、一貫目近く殖えた
お喜ぶ愉快だ、よの旨、僕の學校も、長距離

競走があつた僕も僕のベストを走つた
 その結果個人として僕も第一着團
 體として僕等の級も第二着であつた
 一着を第一着と云ふ年お白々うけたのを残
 念ふ事あるがその後如く研究して見
 ると僕等の級の作戦計画が少くまづ
 かつたのだ。この次少くまづと優勝旗を
 取つて是までのレコードを破つて見せる
 屹度だ僕も朝の冷水摩擦と夜の反

有とを八子の當りから実りして居る
 山本先生の注意もよめておられたのだ僕も
 これを寧ろ意志修養の一方便として
 実りして居るたまたまは随分情事等の生
 ずることもあるがそれもおおむね時の愉
 快も何ともいぬ強^ひく^て 勧めをせぬが君も
 やつてみても少くもだ僕も良しとおもふ
 川と逢つたり宜しうそそく礼儀
 矢 敬

一二時間

「思ひ立つ日が吉日」とは成功の秘訣を教へたる名言なり。思ひ立つやがてその事に取りかゝれば、興味涌くがごとく、わが身の勤勞に服せるを忘れて、たゞ快樂を取れるを覺ゆるのみ、従つて事業の進行も自ら速かなり。もし、思ひ立つ日に始めざらんか、當時の興味は索然として消失し、他日これを始むるに非常の困難と苦痛とを感ずるのみならず、成功の一段に至つても即時に着手したるところに劣ることを免れざるなり。

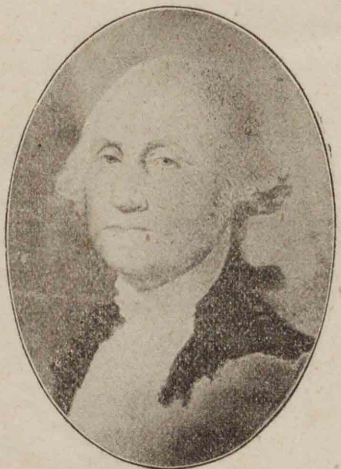
ウォルター・ローリーは僅少の時間を以て多くの事を成し

ウォルター、ローリー
英國ノ航海家
(1562-1616)

たる人なり。その術を問へば、即ち曰く、「何事にてもなさねばならぬことは、直にこれをなすにあり」と。あゝ、これ語淺くして意深きものにあらずや。世の失敗者を見よ、多くは

明日ありと

明日ありと思ふ
心のあだ櫻よは
に嵐の吹かぬも
のかは

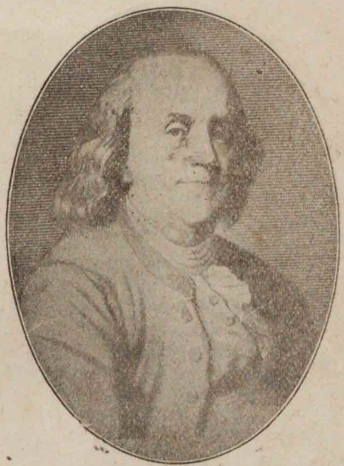


これ明日ありと思ふ心のあだ
櫻、夜半の嵐に吹拂はれて茫然
自失せるものにあらざるはな
し。鐵は熱せられてなほ紅き
うちに打つべし、枯草は太陽の

輝きをる間に乾かすべし、事は時機を失はずして始むべし。古より大人と呼ばれ豪傑と稱せられし人は、大抵みな分陰を惜みて機會を捉へし人なり。

ワシントン
米國第一代の大
統領
(1732-1799)

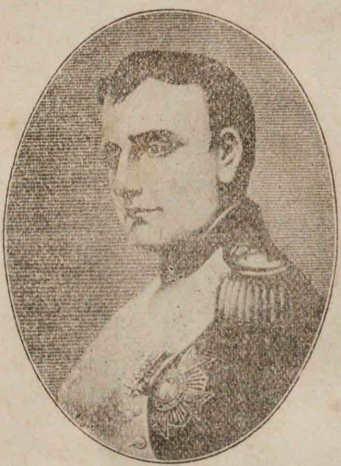
フランクリン
米國ノ政事家
(1706-1790)



フランクリン

時を誤るものは責任を誤るものなり、斷じて世間の信用を受くることなし。ワシントンの書記、一日遅刻せり。辯疏するに、己か時計の後れたるを以てす。ワシントン直に告げて曰く、「汝は正確なる時計を買ふべし。さなくば、予は他の書記を備ふべきのみ」と。フランクリン常に遅刻勝なる奴僕をわらつて曰く、「善く辯解する人は役に立たぬ人なり」と。ネルソンある時軍艦に乗らんとす。その前夜、御者來りて「明朝正六時に馬車をまはすべし」といふや、かれは曰く、「それより十五分前に來るべし。一

ネルソン
英國ノ海軍提督
(1758-1805)



ボナパルト

定の時より十五分前にあるは予が予たる所以なり」と。ナポレオン、一夕諸將を晚餐に招く。期に及んで諸將尙來らざりければ、彼は一人にてその食事を始めたり。將に食卓を離れんとする頃諸將の漸く來れるを見て點頭して曰く、「諸君、食事の時間は既に済みたり。請ふ、各自の職務に服せん」と。凡そ時間を大切に守るは、勤勉の習慣を生じ、責任を盡し、義務を重んずる所以にして、身を立てる基なり。(立身策に據る)

一三 金で買へぬもの

ある町に一人の靴屋がある。彼は何の心配もない様子で、朝から晩まで、いかにも楽しさうに歌を歌ひながら靴を作つてゐる。

隣はこの貧乏の靴屋とは違つて大變な金持の家だ。しかし、靴屋のやうな楽しさうな歌も歌はないのみか、夜もろくろく眠らない。これは銀行家である。

銀行家は一晩まんじりともせず、やうく朝日の昇る頃になつて、うとくと眠りかける。すると、隣の靴屋がもう起き出して、歌を歌ひながら靴底をたゞきはじめるので、折角結びかけた夢が、すぐ破れる。銀行家はいまくしさうに、

こんなことを考へる、神が、たべるものや、飲むものや、すべてものを金で買へるやうにしておきながら、眠ばかり金で買へぬやうにしておくのは、全く神のをちどだ。

ある日彼は、隣の靴屋を呼寄せた。そして、君、一年にいくら儲るね。と尋ねた。二年につて、旦那の前ですが、わたしらはその日く暮しなんで、へえ、どうにか、かうにか、歳の暮まで漕ぎつけていくんです。ほんとにみじめなものでさあ。と、人のいゝ靴屋は遠慮のない調子で答へた。

「そんなら、一日にいくら儲るね。」

「二日にだつて、旦那、多かつたり、少かつたりでさあね。まあ、何でも、しらくあけから起きて、夜も遅くまで稼がなければ

ば、やり切れやしません。

銀行家は靴屋の質朴な話ぶりを笑ひながら聞いてゐたが、やがて「さうか、それは氣の毒だな。しかし、安心し給へ。わしが、やりきれるやうにしてやるから」といひながら、百圓札を十枚、靴屋の前へはふり出した。そして、驚きあきれてことばなき靴屋をじろりと横目に見て、「しかしこちらに註文があるのだ、あの朝つばらから稼ぐのをやめてもらひたい。歌を歌ふのと靴底をたたくのをな」といひました。

靴屋は委細承知して、ほく／＼もので家へ歸つた。早速金を穴藏の中へしまひこんで、びしんと錠を下した。しかし、靴屋のしまひこんだのは金ばかりではなかつた。金と一

緒に、楽しい歌までも穴藏の中にしまひこんでしまつたのであつた。

あゝ、もう、あくせく稼ぐことはいらぬ。朝もゆつくり朝寝ができる。夜もはやくから寝られる。かう思つたが、それはつかの間のことで、いやはや、大變なことになつた。金と一緒に、隣から、その「寐られない」といふやつがついて來た。そして「安眠」といふ大事の寶が靴屋から逃げていつてしまつたのだ。夜も晝も、たゞもう金が心配でならなくなつた。もし盗まれたらと思ふと、氣が氣でないのだ。ちよつとした物の音にも肝をつぶして、穴藏をあけて見るといふやうなわけで、まるでまんじりとすることもできない。

十日たち、二十日たち、一月たつと、靴屋は瘦せ衰へて、血の氣のない、青い顔色になつてしまつた。もう、さすがに堪へ切れなくなつて、銀行家のところへかけこんで、かう叫んだ。「わたしにもとの通りのたのしい歌と、やすらかな眠とをかへして下さい。千圓はこのまゝお返し申します。」

(日曜讀本に據る)

山路愛山

名ハ彌吉

評論家

大正六年歿

年五十四

一四 大石良雄 その一

山路愛山

赤穂の城下は、早馬の爲に大騒ぎとなりぬ。江戸城中、刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門、茅野三平は、直に馬に跨りて日に行くこと三十里、五日にして赤穂に達し、變を國老

大石良雄に報じたり。長矩自殺の命下るや、原惣右衛門、大石瀨左衛門は更に同じ早さを以て赤穂に達したり。君家事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中類ふ者なく、而も温厚にして庸愚なるが如き大石良雄は、こゝに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の渾名を蒙りて久しく光を韜める彼は、衆人に驚異せられぬ。赤穂城中の會議は開かれたり。事情は愈、明かになりぬ。大野黨と大石黨とは隠然として分れぬ。大野九郎兵衛は良雄と同じく赤穂の家老にして、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れたりしかば、班は良雄の下に在りと雖も、勢力は却て大なりき。彼は専ら幕府の命に恭順すべきを唱へ

て、成るべく穩和に城を明渡さんと主張せり。然れども血氣にはやる藩士等は、彼を以て卑劣なり、不忠なりとし、城を枕にして上使を引受け、潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり、まづ主君の弟大學頭長廣君をして主君の後を嗣がしめんことを幕府に請ふべしと。

越えて二日、城中の會議は再び開かれたり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を唱へたり。多くの人々は良雄の説に左袒せり。大垣侯戸田采女正は大學頭を立てんと請ふことの却て幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり、四月十九日大野は遂に遁逃せり。人は滅ぜり、籠城は遂に行ふべからずなれり。

戸田采女正
長短ノ母方ノ從
弟

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の説を執れり。復讐の説は勝てり。血判に與る者百十餘人、その中江戸より來つて難に投ぜる者僅に十八人。道路は清潔にせられたり、人民は警められたり。四月十八日赤穂城の上より、受城使の來るは望まれたり、藩士の血は涌けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より使者は城外に往返せり。翌日城は難なく明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は赤穂藩士の餘りに溫和なるに驚きたり。良雄は京都の山科に住して優游自適せり、田園を買ひ居宅を營みて永住の地と定めたり。彼はかくの如くして身を

四通五達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏の謀者を欺けるなり。謀者は雙方より出されたり。上

杉氏は良雄を京都

に偵察せしめ、良雄

は吉良氏を江戸に

偵察せしめたり。

上杉氏は吉良氏を

保護することに勉

め人を遣はして吉

良氏の邸を守らしめ、且其の采邑の人に非ざれば婢僕に用ふることなかりき。是を以て吉良氏の事情を探るは極め

筆蹟
祖父内蔵助當家
へ被召出候は十
五六之年にて兒
性相勤候様に承
及候其通に御覺
え候哉いづれ之
御肝煎にて被召
出候哉
卯月七日
大石内蔵助
大石無人様
人々御中

一様、父の御名も、母の御名も、
すめ、おとこも、おとこも、おとこも、
おとこも、おとこも、おとこも、
おとこも、おとこも、おとこも、

かきしり
おとこも、おとこも、
おとこも、おとこも、

大石良雄筆蹟 (帖雲瑞)

て難かりき。

年は暮れぬ。記憶すべき三月十五日は再び来りぬ。赤穂

の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の

同志を集めて先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し鶯は

老いて、四條河原の夕涼に都の群衆の雑沓する頃となりぬ。

腰拔賣國奴破廉恥の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。而も彼

は恬として關り知らざるものゝ如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より来る。日ふ七月十八日

長廣藝州に預けられたりと。一縷の望は絶えぬ。此の時

まで義氣金鐵の如く見えし同盟は弛み始めたり。眞に復

讐の志なく、長廣に因りて君家の或は再興せられんことを

希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して亦復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等にその眞意を語れり、而して最も堅固なる最後の同盟は成りぬ。

一五 大石良雄 その二

山路 愛山

此の年十月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金を携へて江戸に赴けり。吉良氏の防衛は猶密なりき。彼は其の本所の邸を以て卑濕なりとし、之を修補するまで麻布なる上杉四氏の別邸に住へり。是

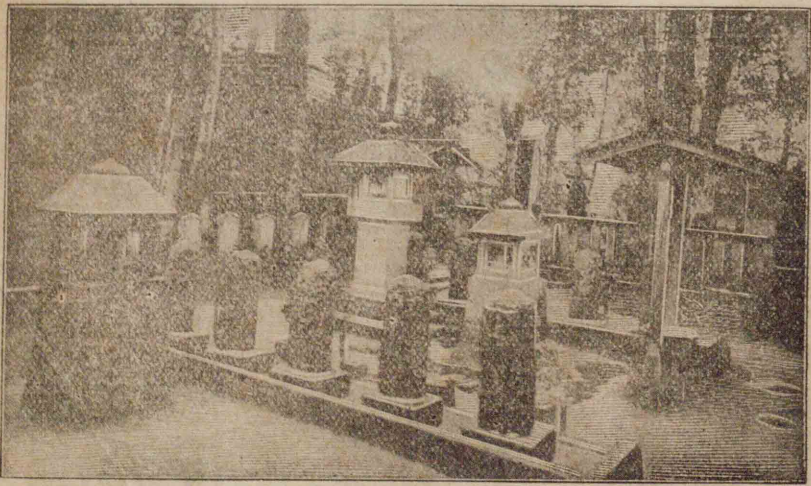
彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命の覺束なきを以て早く事を濟さんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。而も良雄は聽かざりき。

良雄父子は直に江戸に入ることを敢へてせざりき。彼はまづ武州の平間村にありて竊に吉良氏の動靜を覗ひ、十一月五日、漸く變名を以て江戸に入れり。十二月に至つて吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年はこれを窺へり。彼等は何處より來り何處に去るを知らず。吉良氏もこれに氣付かざりき。

十二月十三日に至つて、良雄は卒然淺野長澄の邸に至りて、

長矩の後室瑤泉院夫人に謁し、主家の預り金を會計して其の餘剩を返せり。しかも彼の一事は猶秘して語らざりき。蓋し夫人は夙に賢を以て藩士に欽仰せらる。去年の變、大學頭長廣は老中の命を受け、取る物も取敢へず走り還つて夫人に告げたり。夫人は少しも驚かず、徐に問へり、「仇人は誰にして、其の死生は如何」と。長廣は義央の死生を知らざりき。夫人は曰へり、「更に登城して後、再びわれを訪はれよ。兄死して、弟たる者仇の存亡を知らざることやはある」と。かくて夫人は終身長廣に會はざりきとぞ。翌十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

此の夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事装束せる四十七個の人物は、~~二~~隊に分れて吉良邸の~~二~~面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬨諍叫喚の聲は聞えたり。既にして笛は再び鳴れり。火事装束せる四十七個の人物は吉良邸を出て去れり。夜景は始の寂寥に返れり。雪霽れて夜も亦明けたり。例



泉岳寺四十七士の墓

の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして鹵簿を急げり。忽ち聞く、路人の喧嘈なるを。始めて知りぬ、赤穂の浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たるを。

良雄は吉田兼亮・富森正因を大目付仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に詣り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀んで其の志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。人あり、曰ふ「上杉氏の衆至る」と。良雄は同志を警めて防禦の備を爲せり。而して上杉氏の衆は終に來らざりき。

此の日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)・久松(松山)・毛

利(長府)・水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

元祿十六年二月四日、四十七人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の杯を賜へり。良雄は他の十六人と共に幕府の檢使の前に自殺せり。

良雄は外濫藉にして内に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事も打靜めて、騒がしきことを嫌ひたりき。彼は如何なる場合にも長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒に平和を愛するものに非ず、爲すべきことは必ず成し遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛

ストア
古代希臘ニ起
ル哲學ノ一派

すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以の者、職として此の品性ありしに由れり。(愛山文集)

牧場

岩代國岩瀬ノ牧場

杉村廣太郎

號ハ楚人冠

新聞記者

明治五年生

一六 牧場の曉

杉村廣太郎

じやんくくくと半鐘の音が霜夜に冴えて、如何にも氣たたましく聞える。僕はがばと起きた。外面はまだ暗い。昨夜湯に入つて打寛いで、したゝか夕飯をたべた迄は覺えてゐるが、それから先は一瀉千里、唯一息に寐てしまつて、今始めて目が覺めた。此の鐘で愈、牧夫、耕夫が勢揃をして牧場の仕事を始めるのである。「行つて見ようではないか」と、

側に寐てゐた友の畫伯を促せば、寒さと睡たさに辟易して、「畫は想像でも書けるから、君だけ行つて來たまへ」とて起きようともしない。僕は艷然として手早く着物を改めて出た。實のところ、僕も内心は想像で行きたかつた。

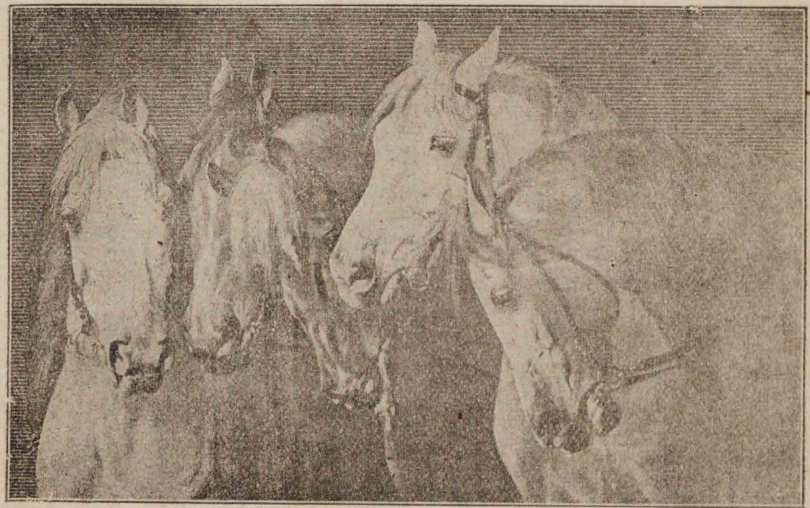
眞暗な廊下を手探りで事務所の方へ出ると、此處の板間の中央に切つた圍爐裏を取圍んで、大きな男が二十人ほど立ち、はだかつてゐる。赫々と起つた炭火の光に映る所を見ると、何れも脚絆、草鞋かひくとしく穿きこんで、頭はすつぽりと頭巾で包んでゐる。腰には鳶口だか鎌だかやかましさうなものをぼつこんで、いかにも物々しい。

外の軒下には、同じ風體をした女が矢張二十人許り寒風に

佐野源左衛門尉
謠曲、鉢木ノ主
人公

吹曝されて立つてゐる。折しもあれ、憂々たる馬蹄の響が遠くより傳はつて、間もなく二頭づつ繋いだ馬を片手に取りながら走らせ來る人が大分ある。中には、悠然と鞍壺に乗つて佐野源左衛門尉常世唯今着到といふ見えのもある。霜白き曉の空、鏗々たる半鐘の音に連れて人馬の馳せ參ずる様、戰場もかくやと勇ましげな牧場を、生優しい風流らしきものと心得て來た僕は少からず面喰つた。頓て一同集つたと見えて、頭領らしいのがそれ、仕事と持場の割當を言渡す。言渡された者はそれ、部署に就いて、八方へちりつになつた。仕事は六時に始つて、夕の四時か五時に終る。其の間二三時間毎に休憩時間を半鐘

で知らせると、銘々其の持場々々で其の儘休む。子持の女などは、此の時を待兼ねて子供を連れて來させて、畑の眞中で乳を飲ませる。鐘の鳴ると同時に、母は子の方へ、子は負はれた儘母の方へ互に駆けよる様、如何にもいぢらしさうな。持場といふのは色々ある。林を造る、木を樵る、垣を結ぶ、小屋を建てる、畑を耕す、草を刈る、馬を追ふ、牛を飼ふ。牛の病む時は病舎に牽いて行つて看とる。牡牛の出來過ぎた時は不便ながら殺す。秣はライ・玉蜀黍の類を刻んで新鮮保藏として秣坑に貯へる。冬のさなか池の水が厚く張詰めると、それを切つて氷室に貯へる。數へ立てれば仕事は數限もない。牧場の内に生を送るものだけが三百人に



牧馬 (泰西名畫)

餘るといふ。

六時少し過ぎて夜は追々に明けはなれた。雪袴穿いて頼被した子供が三々五々連立つて出て来る。女の子もまじる。中には犬の子を連れてふざけちらして行くのもある。何處へ行くのかと聞けば、つい近くの學校へといふ。學校は九時に始るのだが、父母共に仕事に出た後

一人家に居てもつまらぬといふので、今から散々道草を食ひながら、三時間ほどかゝつて行くのだといふ。大陸式の原野だけに、子供までが大陸式に出来てゐる。(ひとみの旅)

一七冬景

寒星

寒星一天、深黒なる屋根の上、深黒なる山の上、到るところとして星ならざるはなし。葉落ちたる櫛の梢、大いなる箒の如く空を摩して、枝々星を帯びたり。靜かに中庭に立てば、山頂のあたり、波の如く夜嵐の過ぐるを聞く。殷々として遠雷の如きは、隣家、夜靱を磨るなり。

寒 樹

粉雪ちらく、止みて日出でたれど、底寒きこと甚だしく、北風終日膚を刺す。

日落ちて天紫なり。葉落ち盡したる櫟の大樹、幹は老將の如くに硬く、節高なる梢頭より針の如く、絲の如き千萬枝縦横に射し出で、紫の空を挿す。一枝骨を刺して寒きを覺ゆ。上に蒼ざめたる月あり。空は凍りつきたる様なり。

冬 至

今日は冬至なり。

霜枯の草を踏みて野外に立てば、一望寒景蕭條として、枯蘆風に戦ぐ音、葉もなき川楊に囀る鶴、水涸れたる野川の音、

何れも年の行くく、暮れなんとするを語る。

歲 除

晴れず、曇れど降らず、鬱陶しき年の暮なり。

我が宿にも、山より松を伐り來りて立てぬ。前川に泊する

舟の上にも松あり、注連繩あり。

天下事なく、我が家事無く、客無く、債鬼なく、又餘財なく、淡々

焉として年は靜かに暮れ行く。(自然と人生に據る)

一八 初日影

武 島 羽 衣

かゝやきまさる。大東の

國の光をあらはして、

武島羽衣
名ハ又次郎
國文學者
詩人
明治五年生

やさしく武く勇ましく
豊榮のぼる初日影。

闇に迷へる天地の

胸に光の矢を投げて、

萬の物を生きさする

初日はげにも神なりや。

富士の嶺あふぐ寶田の

千代田の宮の松が枝に

こがねの色にさす影は、

をがまぬ人もなかるらん。

新に勝てる膠州の

海にうつろふ日の御旗

ひらめく上にさしそふは、

思ひやるだに勇ましや。

七五三繩くゞる萬歳の

聲にたぐひて入りくるは、

明けてめでたき新年の

ことほぎいふにさも似たり。

軒の小雀初がらす、
谷の小草も野の苔も、
やさしき光身にあびて、
うれしき色音もらすかな。

かゞやきまさる日の本の
天皇のみいつをあらはして、
やさしく武く勇ましく
豊榮のぼる初日影。(續花紅葉)

川上眉山

名ハ亮
文學者
明治四十一年歿
年四十
四日
月
明治三十一年一
宿
神奈川縣三浦郡
逗子町の旅宿

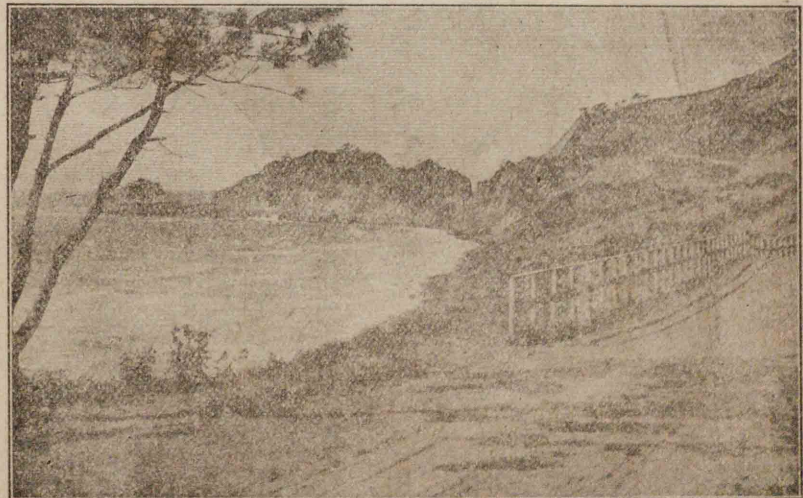
一九 三浦路

川上眉山

四日早起、昨夜起草したる稿を繼ぐこと少時、別に私書二通を認めて日高く宿を出づ。村松風は靜かに醉を吹きて浪いとやさしげに磯を打つ。空は晴れたり。見渡す島山は打霞み、雲雀は高く上に鳴連れてさながら春の心地す。道は更によし。一帯の沿岸、風色すべて佳なり。森戸の川を渡るに、一岬、松深く、風情優しき所、こゝに明神の祠あり、千貫松とやらんありと聞きしかど今は見えず。岩礁漸く繁し已にして一岬高く出でたる長者ヶ崎の上に出づ。風景更に佳なり。由井ヶ濱、稻村ヶ崎、七里ヶ濱の波は玉を展べて、江の島山は盆石を浮べたり。長井の荒崎アサギは南に長く、天神

ヶ崎は近く、三浦の岬は遠く、
蒼々幾十里、大島の煙はほの
かに空をかすめて、伊豆の山
脈は蜿蜒としてはるかに雲
煙の間に出没す。

我が富士なるかな、いづく
如何なる時にも秀いよ〜
秀に、従容迫らず麗しけれど、
侮られず、静かに扶桑の美を
收めて高く雲表に傑出す。
折しも薄靄かすかに裾を罩



嵯峨長者山景

めて空の匂いと深し。我が富士なるかなと、獨り斷崖の上
に立ちて暫し去ること能はざりき。
大崩おほくづの下を過ぎ、浪打際を縫うて處定めず行く。十歩一景
を生ず。風光到る處によし。已にして暫く田畦の間に入
る。僧侶三四、年賀の配物持たせて各戸を廻るに逢ふ。前
を行く野夫に語らひ寄りて道を共にするに、いとをかし。
苦打つ竹を擔げて行くもの、魚籠肩に急ぎ來るもの、まだ正
月を遊びありくもの、背負梯子うしろに焚木負ひて熊手の
せて歸るもの。處を問へば、此處を蘆名とかや。連の男我
が爲に遠廻りして導きて又渚に出づ。鹿島といふは、こゝ
らあたりなるべし。白砂前に走り、青松後を繞りていと麗

かなる入江なり。海は風ぎて鏡の如し。見渡す方はみなが打煙りぬ。投網を手にしたる男三人海中に立ちて鱒の寄り來るを窺ふ。一群の子女、紅紫を交へて渚に立てり。眞砂を踏んで屈曲したる濱邊を尙ほ行くこと少時、僅かなる鹽田を見る。鹽焼く煙もあらばと思へど、まだ閉ぢたればなし。空は霞み渡りて、浪いよゝゝ優なり。のどかに打語らうて徐歩して長井の村に入る。連の男の酒を好むといふに、飲ませんと思ふ興深く、強ひて酒亭に案内せさす。土藏づくりの中二階に通され、窓を開くに海そこもとに近し。丸裸なる漁家の兒群三十人ばかり、手に手に注連繩を持ちて地を打叩きつゝ、いふ「出さいな、出さいな、出ないものはが

にぐぞう」と相追うて走る。(眉山美文集)

二〇 硝子障子

正岡子規

正岡子規
名ハ常規
文學者
俳人
明治三十五年歿
年三十六



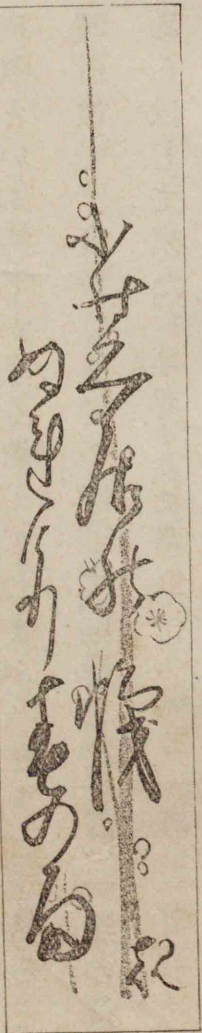
正岡子規

去年の正月と今年の正月と、自分に格別違つたことも無いが、少し違つたのは、からだが餘計に弱つたと思ふこと、元日の蜜柑の喰ひやうが少かつた事と、年賀のはがきが意外に澤山來た事と、病室の硝子障子にし

たのは、寒氣を防ぐ爲が第一で、第二には坐ながら外の景色を見るためであつた。果して暖い、果して見える。見えるとも、見えるとも、庭の松の木も見える、杉垣も見える、物干竿も見える、物干竿に足袋のぶら下げてあるのも見える。その下の枯菊水仙、小松菜の二葉に霜のおいてゐるのも見える。庭に出してある鳥籠も見える、籠の鳥が餌を喰ふのも見える。さうしてちよいと尻をあげて糞をするのも見える。雀が松の木をあちこちするのも見える、鶺鴒が四五羽連れ立つて、枯木へ來たと思ふと、すぐに又はらくと飛んでしまふのも見える。鶯が一羽、だまつて垣根をあさりながら、ふい〜と飛びまはるのも見える、裏戸明けて水汲みに

筆蹟
小芝居の轍ぬれ
けり春の雨 規

行くのも見える、向ふの屋根も見える、上野の森も見える、凍つたやうな雲も見える、鳶の舞つてゐるのも見える、四角な紙鳶と奴紙鳶と二つ揚つてゐるのも見える、四角な紙鳶が、めんくらつて、屋根の上に落ちたのも見える、それを下から



蹟筆規子岡正

引張るので、紙鳶が鬼瓦にかゝつてうなづいてゐるのも見える。殊に雪の景色は、今年つくくと見た。山吹の枝に雪の積つたのが面白いといふことも、今年知つた。これらは硝子障子についてほゞ豫想した事であつたが、そ

の外に豫想しない第三の利益があつた。それは日光を浴びる事である。眞晝近き冬の六疊の室の奥までさしこむので、その中に寝てゐるのが暖いばかりでなく、非常に愉快になつて、終には起きて坐つて見るやうになる。この時は病氣といふ感じが全く消えてしまふ。枕もとを見ると、寒暖計は七十度近くまでのほつて、福壽草の蕾は一點の黄をあらはして來た。(子規小品文集)

二一 柿二つ

高濱 虚子

ランプの光は靜かに更けて行つた。時々上野の森に反響して轟き過ぐる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈ん

高濱虚子
名ハ清
俳人
明治七年生
上野の森
東京下谷區上野
公園ノ森
根岸
上野公園ノ北ノ
麓ニアル地
正岡子規ノ住宅
ガコ、ニアツタ

だやうに淋しかつた。

日によつて不定ではあるけれども、此の頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜中頃から再び上るのではあるが、其の平熱になつた時の心持は、流石にすがすがしかつた。病主人の頭はさう云ふ時に一層透明になるのであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判断を數かぎりない句の上を下すことが出來た。句の良否は色の黑白の如く明白に、一見して立ちどころに判断するところが出來た。自分で自分をあやしむ位に、それが容易に且迅速であつた。

彼の淋しい家庭には六十を過ぎた老母と今年二十七にな

つてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いたる母も、嫁期を失した妹も、唯主人の病を看とるために生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で、病室の物音に耳を欹てながら、各黙つて針を運んでゐた。やがて妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。それは病主人の枕許に盆に載せた柿を運ぶためであつた。

「もうこれきりかい。」と彼はながし目に其の盆の柿を見ながら聞いた。

「昨日あんなにお食べだから、もうこれぎりよ。」と妹は答へた。盆の上にはたゞ二つしかのつてゐなかつた。

彼は總べてのものに健啖である中に、殊に果物を好んで食

うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

彼は忽ち食指が動いたのだが、たゞ二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業――投書函の一掃――が完了した時の慰藉の料に取つて置かねばならなかつた。彼は心のうちで呟いた。

「選がすんでしまつたら、此の柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。たゆまずに片附けてしまへ。」と。斯くて漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬きもせず牙え渡つた。傍の火鉢に炭のつがれた事も、時計が十二時を打つた事も、老いたる母の寢床に這入つたことも、彼は知らぬではなか

つたが、其等は餘り深く其の注意を惹かなかつた。妹が床に這入つたのはそれから一時間も後であつたが、それは其の物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、いつふせつたとも分らぬ位ひそやかであつた。

静かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、此の夜の色の中にひとり帝王のやうな威を示してゐた。

最後に手に當つた草稿を見終つて後、彼は念のため投書函を掻き探して見たが、もう其處には一枚も留めなかつた。彼は朱筆を投げ棄てたまゝ、兩手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。

久しく心に掛つてゐた仕事を片附けてしまつた慄へるやうな満足的情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐とで、彼の心は暫く搔亂されてゐた。が、やがて其の頭を抱へてゐた手をほどいて蒲團の外に現した彼の顔はいよいよ興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頬のあたりの赤みは色を増してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも睡いとは思はなかつた。燈火を中心とした此の病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない極めて自由な、希望に充ちた世界の様に思はれた。今や彼の體温は再び上つて、其の爲にいつもの酒に酔つた様な興奮した心持になつてゐる

愚庵

俗名天田五郎
明治三十七年寂
年五十一

天王寺

山城國葛野郡嵯
峨村ニアル臨濟

宗ノ巨刹

京都五山ノ一

峨山和尚

俗名橋本昌禎

天龍寺派管長

明治三十三年寂
年四十九

のであるといふ事には気がつかうともしなかつた。
彼は煩はしげに盆の上の柿を見やつた。柿の赤い色は媚
びる様に輝いてゐた。抑へてゐた彼の食欲は猛然として
振ひ起つた。彼は餓ゑた虎が残忍な眼を光らせて兎を擱
む様に、忽ち其の柿の一つを取上げて、皮をむき始めた。
此の柿は京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪
僧から贈つて來た釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さ
ういへば形がどこか釣鐘に似てゐた。此の禪僧といふの
は、維新の戦亂に母と妹とが生死不明になつてしまつた其
の行方を、何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたこと
が動機となつて、中年から天龍寺の峨山和尚の鉗槌の下に

僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があ
つたのであるが、此の禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる
上に、萬葉調の歌をよくし、又書に巧であつた。俳句は作ら
なかつたが、其等の關係から互に推重して、何かにつけて贈
答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は、桃山草庵に禪
僧を訪ねた人が、其の庭前の柿を託されて、遙々と携へて歸
つて病床に齎したものであつた。

それは昨日の事であつた。其の人がまだ枕頭に在る間に
彼はもう辛抱が出来なくなつて、其の柿を三つ續けざまに
食つた。其の人が歸つた後も、夜寐る迄に十ばかり平げた。
今夜枕頭に運ばれたものは其の残りのたゞ二つであつた。

彼は其の一つを取つて其の皮をむくより早く、忽ちそれに武者振りついたのであつたが、もう大方食ひ盡して蒂の所に達した時、少し顔を擧めた。それは稍、澁かつたのであつた。さういへば昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼はそれに頓着せず、其の蒂の所の際まで少しも残さずに食つてしまつた。

三千の俳句を閲し、柿二つ。

當用日記に、彼は毎日の出來事を句にして十句宛書くことを日課にしてゐた。明日になつて今日の部を認める時に、忘れぬやうに此の句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て來るやうに思はれて、頭がぐらくした。彼は

始めて熱の高いことを覺えたのであつた。(柿二つ)

三三 蒔かぬ種

「蒔かぬ種は生えぬ」とは、よく人の言ふ諺なり。骨を折らざれば成功せず、勉強せよ、勞動せよといふ意味に於ては何人も疑ふものなし。然るにこゝに怪しむべきは、生物については、蒔かぬ種の生ゆる如き考を有する人の少からぬことはなり。

昔は、蛆は肉などの腐れる處に自らわくものと信じ居たり。然るにイタリヤのレヂと云ふ學者は、實驗によりて此の事實の實否を確めんとし、細き金網にて肉をおほひ置きしに、何

レヂ
(1839-1888)

日を過ぎてても、何程肉は腐りても、蛆は一匹も生ぜざりき、かくて蛆は決して種のなき處へ自然にわくものにあらず、その實、蠅の來りて卵を産みつくるにより、その孵化して蛆になるものたることを確め得たり。

或は云はん、「生物學上、蒔かぬ種の生えぬ事を知り得たりとて、人間生活の上に何の益かあらんと。」これ大いに然らず。試に見よ、近年大いに進歩したる消毒法の如きは、全く此の理を實地に應用したるものにあらずや。若し病氣の基となる微細なる生物が、種なきに自らわくものなりとせば、現時の消毒法は何の用をもなさざるべし。又かの食物の罐詰なども、物の腐敗するは、目に見えぬ小さき生物の働なれ

ば、此の生物の種の舞ひこまぬやうに、食物を封じ置けば、何時まで置きても腐らぬ筈なりと云ふ理由より案出せる法なり。

此の他、蒔かぬ種の生ゆる如く誤り居ることは少からず。

これ何れも觀察の粗漏なるがためか、又は推理の精密ならざるがためか、に外ならず。例へば新に掘りたる池に、翌年より蜆のわきたりといひ、或は鰻の生れたりと云ふが如きは、屢、聞く所なり。なるほど一通り考へたるところにては、此等の動物は、とても乾きたる地面又は空中を飛びゆく力はなければ、山の高き處に新しく掘りたる池などに移る筈はなし、全く其處に自然にわきたるに相違あらじと思はる

れど、更によく研究すれば、鰻なり蜆なりに遠く隔りたる處に行く力全くなしとは言ひ難きを見るべし。

鰻は元來海中に孵化するものにて、初めは幅廣く透明にして白魚の如き形をなせど、成長するに従ひて身體次第に縮り、幅も狭くなり、色も次第に黒くなりて、所謂はりうなぎに變ず。このはりうなぎは幾千幾萬となく群をなして河を溯り、次第に細き溝などに進み、雨降れば道路を横ぎり、草の間を這ひなどして、上へ、ノ、と進み行くものなれば、終には山の頂に近き池にも達することを得べし。鰻の發生する模様は、近年まで詳しくは知られざりしが、今日にてはその次第も明瞭になりて、從來海濱にて屢、人の採集したるびい

どろうをは全く鰻の幼兒なることを確め得たり。

貝類の新しき池の中に生ずるは、一層不可思議なるが如くなれど、これにも同じく外より移り來る道なきにあらず。

貝類の幼兒は二枚の殻を開閉して、雁鴨などの羽毛に附着することあれば、一方の池より他の池に貝の種の舞ひこむことは決して珍しきことにあらず。現に東京大學の某教授が銃獵にて獲たる鳴の足に、大きな貝の挟み付き居たることもあり。されば、よく研究すれば、貝類の如き餘り運動せざる動物にても、遠方に速にうつり行く手段は有るものと知るべし。従つて前年掘りたる池に、今年貝の居たればとて、直に此の貝はこの池にてわきたるものなり、他より

來れるにあらず」と断定するは、輕卒の譏を免るべからず。もとより、世界は廣く、人間の知識は極めて淺きものゆゑ、何處如何なる時に於ても、種なしに生物は決して生ぜざるものなりとは斷言するを得ざれども、ともかくも、今日までの經驗によれば、「蒔かぬ種は生えぬ」と云ふ諺は直に取つて之を生物學の方面に用ひても、少しも誤あらざるなり。

(簡易動物學講義に據る)

天王寺口の戰
元和元年五月六日
眞田幸昌
通稱大助
幸村ノ長子
元和元年(三十三)戰死
年十六

二三 眞田幸村父子

大阪夏の役、天王寺口の戰に、眞田幸昌敵と組討して取りたる首を鞍の四方手に附け、負うたる傷より流るゝ血しほ拭

幸村
眞田氏
通稱左衛門佐
大阪方ノ勇將
元和元年(三十三)戰死
年四十六

ひもあへず馳歸る。毛利森豐前守勝永、榎島玄蕃允昭光、幸昌が傍に立寄り、扇を開きて打扇ぎつゝ、偕もくゝと大いに感じけるに、父幸村も喜悅の笑を湛へて、「手は淺きか」と尋ねければ、幸昌は薄手にて候と答へたり。明くる七日、和議の將に成らんとするを聞き、幸村陣より幸昌を城内に返さんとて、近く之を呼び、「汝左衛門が子たる故を以て、諸將と肩を比べて采配を取ること、身の面目にあらずや。父は今日討死と思ひ定めたれば、今生の名殘に、父をよく見覺えて、更に悲しみ歎くことあるべからず。此の軍愈味方敗北して、秀頼公御自害あらば、直に其方も腹搔切つて、死出の御供申すべし。命助らんとて、必ず降人などに出

十一

で父が名を汚すべからず。若し又秀頼公此の度の死を遁れたまはゞ、假令何れも自害に及ぶとも、其方は命を全くして、下人一人にても生残りたる者あらば、扶持し召連れて、秀頼公を守護し申すべし。くれぐれも父が武勇の名を汚すことあるべからず。是、子たる者の孝行の第一。親の志を繼ぐこそ忠義なれ。早々城内へ罷歸れ。とぞ言ひける。

幸昌父が詞を聞く中より、落涙袖を絞りけるが、やうくに歎きを止め、情なき仰かな。討死と思召し定め給ひなば、大助にも共に討死仕れとこそあるべきに、如何でさは宣ふぞや。秀頼公を見立て申すこと忠義に候はゞ、父上其の任に當り給ひてこそ、かひはあるべけれ。然るに父上は討死あ

伊豆守殿
眞田信幸
幸村ノ兄
萬治元年(三三〇)
卒
年九十三

りて、弱年の某に罷歸れとの儀、心得難く候。關東勢の中には、伯父伊豆守殿を始め、一族の人々もおはし候へば、父が討死に悴の大助は、何とて一緒にあらざるぞや。父を棄て、



眞田幸村
(日本歴史辭典)

腑甲斐なくも陣屋より城内へ遁れ歸りしか。など嘲り給はん。他人はさておき、一族親戚への面目、甚だ以て立ち難し。秀頼公を御見立て申さんは、御譜第の人々多ければ、大助が罷歸るにも及び候はず。又去年母上に別れ奉りし後、御文の便りに、生きながらへて相見んは願はしけれど

も、萬一の際には必ず父上と同じ枕に討死せよ。かりそめの名こそ惜しけれ」と誠め給ひしこともあれば、くれぐれも御免下さるべし。御一緒に今日の軍に罷立ち、せめて雑兵の二三騎も討取り、其の後、腹搔切つて黄泉の御供仕らんと、言切つて、歸るべき氣色は見えざりけり。

幸村も心強くは言ひけれども、今は落涙に及びつゝ、いしくも言ひける嬉しさよ。さりながら父と一緒に討死すること忠義の道に叶はず。長く命を全くせよといふには非ず、今日は命ながらへて、明日にてもあれ、秀頼公御自害の砌、潔く腹搔切つて、泉下に再會を期すべし。今日の御和睦御相談の事、其の實否知れ難し。さればとて、其の成行を見定め

んとて、左衛門程の者が出陣の馬を無下に城へは返されじ。又、戦を猶豫し形勢を窺ふ様子見えなば、必定味方の士氣も衰へぬべし。さるによりて我はこれより引返すことなり難し。あはれ、世の人の願ふ命二つ持てるこそ今の我が身の幸なれ。二つの命を君に捧げて、一つは今日討死して武名を揚げ、今一つは城内へ歸つて、今日明日の體を見届けんとは思ふなり。汝が命はくれぐれも汝が命にあらず、父が命なれば、父が心に任せ、早々罷歸りて秀頼公の先途を見届け奉るべし」と、詞を盡して教訓しけり。

幸昌やうくに聞入れて、然らば御暇申して城内に罷歸り申すべし。愈、今日討死と思召し定められしや」と、又父が顔

を守り見て涙に打沈む。幸村詞を荒らげ、親子の名残何時まで惜みたればとて、盡くる期あるべしや。「左衛門が子の
大助父と引分れて城中に歸り、秀頼公の御生害の際まで附
従ひたり」といはれんこと、後代までの譽、餘人の及ぶべきに
あらず。早々罷立てよ」と云ふ。幸昌成程仰にてこそ候へ。
父上の御名を預りし此の身世に大切に候へば、寄手の追付
かぬ内に御暇申さんと、心強く思ひ切つて父が前をば立出
で、馬に乗るべき體に見えけるが、猶も父が方を見遣りて佇
むを、幸村近習の者を以て、急ぎ罷越すべき由催促しければ、
せんかたなくも乗出し、幾度ともなく父が方を見返りつゝ、
やうく坂を下りて城内に歸りたり。幸村は幸昌を見送

り、落つる涙を押へ、「昨日譽田にて痛手負ひしが、弱る體の見
えざれば、よも最期には人に笑はれじ。心安し」と言ひけり
とぞ。〔名將言行録に據る〕

二四 浦潮より

太田 覺 眠

太田覺眠
西本願寺派ノ僧
慶應二年(三五六)
生
川上事務官
貿易事務官川上
俊彦
今波蘭駐在全權
公使

拜啓野衲を川上事務官と共々最後の
引揚船にて歸朝致す。まゝ旨申上置以處
西比利亞内地奥深く入込み居る同胞を諸
河結氷のため水路の交通全く断絶致るに

今日如何なる手段を取らば引揚船出帆の期
日迄に當港へ到着の見込到底これなく幾百
の同胞は餘儀なく残留する事にお成申候今
後今も本國の保護を離れし心細く敵國內に
残留する同胞の心情を察する時は野村を
如何ふしてもこの憐むべき同胞を棄て
歸郷するに忍びず断然敵國內に踏留る事
に決心致候野村の事事を事務官に申出で

た多時事務官の野村の行方をも以て政府の命
令に背くものなりと一色を作志して止められたり
且曰く君も露國政府の保護は安んざんとす
かと野村曰く予は露國の保護は安んずるもの
ならずその危険は甘んざんとするものなりや
貴官は居留民が唯一の頼とする帝國の國旗
を收めて此の地を引拂さんとす今後残留の同
胞はそれ誰を頼まば予は身償はせしめ此
の人々の境遇を見つゝ船より上ると能く固よ

り死は疾くは覚悟せりと事務官の突然起つて野衲の手を執つて曰く予は最早君の志を沮止せざるを以て予も國民を代つて君の高義を感謝するは我が政府に對し君一人を見殺する責を甘んじて之を受くる君も佛陀の大悲を發揮せよと相對して思ふに感涙は咽ぶやあつて曰く前程遠かり相當の準備ありやと野衲曰く一片の丹心一軀の尊像是我が為し千萬の味方なり而して囊中尚百金の餘財

ありと事務官直に囊底を拂つて巨額の路銀を惠まれ且種々の注意を與へし候旅順開戦の事は已に聞得たり當港より戒嚴令を布かれゆゑ最早日本人の居住を許さず唯今事務官一行の乗込めり引揚船城見送りたらん後に當港に日本人は野衲唯一人として候目下露人の暴行よりも寧ろ支那労働者の家財を奪ふんとし襲ひ来る勢甚だ猖獗を極め居候野衲一人の力到底之を防ぐに由なく今夜は須

彌壇の下に隠れ、一夜城明け、彼等の掠奪を恣にする。免明朝一番汽車にてハッロフスラに到り、順次黒龍江沿岸地方に残留せる同胞を慰問し、慰問致すべくは野村より生還を期す。アハハハハ唯此の上は一日も永く命を保持して一人もも多くの人を慰問し、たき心願。よく候野村の此の行必ず大悲の所冥見あらせ給ふを確信致候。遠く東方を望みて、陛下の萬歳を祝し奉り候。匆々

明治二十七年二月十三日 浦潮 斯德 漢 橋 稿 少

太田覺眠

二五 奉天占領の日その一 澁川玄耳

澁川玄耳
名ハ柳次郎
モト新聞記者
三月
明治三十八年

三月十日。今日は我が半生における好記念の一日だ。昨日とちがつて、好い天気。早旦宿舎を立ち、一時間弱にして渾河左岸の一村に達した。此處は家屋も壊されず土民も落着いて居る様である。早速苦力を探す。三十餘の小柄な男を連れて來た。聞いて姓名を布片に記して上衣の襟に縫付けさせる。兎と米と予が毛皮の寢衣と炊事道具

とを舊の苦力に、其の他を新苦力に分擔せしめる。村を出外れると直に渾河の渡渉點。小高い沙丘がある。登つて見ると、霞の裏に彷彿として奉天の城門が三つ四つ五つと歴々指點せられる。半歳冬營の苦も、連日行軍の苦も一時に拭ひ去られて、急に元氣百倍。

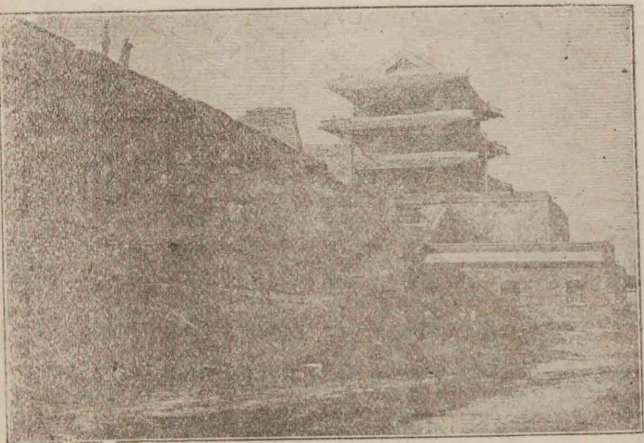
「やつ、上流に友軍が渡つて居る。第一軍だらう。」

「そら對岸に。あれ〜前進する。」

「下手の方のは我が聯隊の兵だらう。氷はまだ大丈夫だ。」

「ちつとも銃聲がせんぢやないか。餘程遠くに往つてしまつたんだ。相變らず退却の名將だなあ。」

我等の渡河には未だ多少の時間があるといふので、沙上に



雄大な景である。

團坐して朝餉を食ひかゝる。綺麗な沙原だ。夏になつても

も多分草も生えなからう。處

處にちらばつて居る小銃弾は

味方のだ、昨夜あたり河を挟ん

で戦つたのであらう。上下十

數里、見ゆる限りの流域は我が

軍を以て滿されてある。三竿

高く差昇つた日は、うらく〜と

河上の氷を照して反射する。

實に予が曾て見得ざりし所の

飯盒の蓋を取れば飯の色が薄鼠色。昨夜の水が悪かつたと見える。ハンケチで漉したにも拘らず、無数の埃も雜つて居る。見ては食ふ氣になれないので、堅パン少し咬つて水筒の冷茶に咽喉をしめす。程なく渡河の命下る。予は馬を離れて單身渾河の岸に下り立つた。處々氷の融けた處に土人の門扉らしい板が渡してある。河幅は十町より廣い。此の流幾箇所か深い淵もあらう、萬一氷を踏抜いたらと思へば、無上に恐ろしくもなる。併し吾が前に幾多の人々が渡りつゝある、上流にも下流にも怪我は無い様だから、先づは大丈夫と自ら慰める。

鴨綠江の水に飲ふことすら、古來幾多の志士の希望として

屈めて居た腰をのばし、上半身を煉瓦壁上に露はして歡喜の眼を放つて見ると、夕霞は何時か奉天城を包み了つた。吹來る風の冷たさに上衣の襟を引立て、居る折柄、俄然丘下に起る大叫喚。續いて響く小銃の音、其の途端逆襲と絶叫して駈上つて來る味方。「仕舞つた。降服と見せて逆襲とは。さても汚なき奴原かな。さりとは茲に一年の武功も水泡に歸して、我が師團の名譽も今日限か」と刹那に込上げる無量の感慨に打たれながら、地物に據らんと引きさがる。咄嗟應變の指揮は誰であつたか知らぬが、幕僚の一喝に戦闘員は前に出る。

空を切つて來る銃彈が悉く吾が頭に集中するかの様に感

馬が放れて居る、豚が逃げ廻る、犬が頻と吠えたり。著しく目に立つのは樹木が多くなつて來たことである。沙河より渾河まで一帶の地方は、彼我冬營の燃料に伐り盡されたからでもあらうが、一村に五六本もあれば樹が多いと眺めた位であつたに、渾河を越すと別天地、到る處に蒼鬱たる森林が展望を妨げる。何だか是迄の滿洲とは勝手が違ふやうだ。

前方の森の梢に聳えて居るのは奉天城。城壁が數里の遠きに互つて居る。前へくと一歩づつ近づくと思ふ中、何時の間にか我等の進路は東北に轉じたさうな。幾程もなく奉天を左に望む様になつて來た。俄に停止。

敵に追付いたと覺しく、那方か判らぬが盛んに砲を打始めた。

一民家に立寄つて白湯を求めると、居合せた家人は畏みて大釜の下を焚きつける。近く銃聲も起つて來た。いよいよ敵に接着したに相違ない。同時に砲聲も益、劇しくなつて來た。

湯が煮え立つた。鞍囊の茶を取出し、湯呑の中に浮かして一口二口飲んで居る中に、ばあんぱんぱん、屋根を掠むる爆聲。敵の齊射だ。

家の前で騒がしい人聲がする。窓から覗いて見ると、一頭の支那馬が門前に斃れて、其のあたりは血に塗れ、一人の老

翁を圍んで七八人の土人が土壁の根に寄り添つてチーチーパーパーと喧しく囀り立てゝ居る。今此處に馬を牽いて這入らうとする處に砲彈が破裂したのだ。

二三十分間で砲聲が止む。敵は又退却したと見える。併し斯う近くなつては到底今の砲も我が捕獲を免れまい。せめて十門許もあつてくれゝばいゝが。

又前進の命令。目標は前方の松林だとの事。つい見えて居るので、予は悠々茶を啜つて、それから畑地を横ぎつて乗りだした。千餘米も進んだ頃、又もや敵が砲撃を始めた。しかも例の急射撃。松林までは尙千餘米ある。その間は全くの平地で、逃げ先も躲れ先もあらばこそ、砲彈は會釋も

なく前後左右に、或は空で開く、或は土煙を打揚げる。

右へ遠廻りをしようと思ふ中ばあんと間近く開いた一發に、馬が驚いて亂跑する。敵陣に飛込まれては一大事とあせるけれども、馬は荒れる、騎手は下手、どうにもかうにも始末がつかぬ。今は砲彈よりも馬の方が差迫つての危険。どうか落ちるならば砂の上にと祈りながら一所懸命手綱を操り身を捻り、やうくの事に馬上安全目標の地に乗付けた。

汗を拭ふ間もなく更に前進。司令部の旗は前方の丘上に翻つて居る。追ひくに徒歩の連中も喘ぎく追付いて丘の麓の枯芝に座を占める。荷物が軽くなつて居るので、

苦力も格別遅れずに遣つて來た。

二六 奉天占領の日 その二 澁川玄耳

小丘を環つて點々たる數十の部落、いづれも皆煙が揚る。敵が退却に臨んで放火したのであらう。畑地には幾百となき放れ馬が右往左往に奔逸して居る。

丘の上には大久保將軍を取巻いて、幕僚將校が謀議を凝す模様。傳騎か斥候か知らぬが、騎兵の往來が頻繁になつて、何となく事ありげに推せられる。

奉天城を望めば霞でよくは判らないが、瞳を凝らすと、北門より鐵嶺方面へかけて一道の砂埃の裏に何やら物のうご

めく様、どうも人馬の行動らしい。更に東門の方にも同様の土煙が揚る。敵だらうか、友軍だらうかと、吾等の盲判斷が決せぬ中、此方に向つて驀地に馳せ來る一騎あり、空を飛んでさながら閃電の如く、看る／＼丘の麓に達した。ひらり馬を飛下りて滴る汗を拭ひも敢へず、駈け上つて將軍の前に立止つた。一禮して曰く、「報告」。

敵だ、敵だ。兩方とも敵ださうだ。

すはや彼の大部隊の敵に兩翼より押包まれるのか、一大事と危惧の眼に幕僚の方を望むと、流石に本職は落着き拂つたもの、即坐に部署を定めたらしく、數人の將校は立地に命を領して四方に馳せる。

丘の麓は俄の活動。砲車は轟々として東南に向つて去る。歩兵は堂々として西と南とに分進する。各敵の來路を扼せんとする。瞬く間に陣地を定めて打出した。敵は漸次に接近して、近きは我等と七八町、弦月形の線を作つて包圍の形。しゆつくと敵の銃彈が丘の上に來始める。石に當つてかあんと響き、芝生に落ちて土を颯げる。予は師團長軍醫部長と並んで、丘上の煉瓦壁内に據り、纔に頸部を露はしながら成行を氣遣つて居る。

刻一刻に近づく敵は路を塞げる吾が歩兵と四五十間に密接した。今に白兵戦が始るぞと手に汗を握つて居る中、敵の兩三騎將校と覺しきが隊を離れて陣頭に乗りだした。

奇怪の振舞を爲すものかな。まさかに鎧踏張り立上り大音聲に名乗をあげて居るのであるまい。兎もあれ不思議の事共と見てある間に、吾が線よりも徒歩の將校らしきが列を出でて立向ふ。敵の將校は馬を下りて相對した。やや暫し切合ひも始らねば打合ひもせぬ。何か話をして居る模様である。

は、あ降參だなと想つて居ると程なく報告が來た。果然果然。一里に互る大部隊を擧つて投降せんとの申込なりとの事。氣早の連中は愉快を呼び、萬歳を呼びて躍らん許。直様幕僚と通譯の七八人が命を受けて丘を下つて行く。司令部に屬する歩騎兵は悉く銃を執つて不虞を警める。

併し銃数が僅か六十許しか無い。司令部の總員は二百餘人も居るけれども、多數は各自一口の劍を帯びるのみである。俘虜の收容は開始せられた。先づ武器を捨てしめ、指定の地に集合せしめるのが普通の順序。多分其の取計ひをして居るのであらう。そろくくと敵は皆此の小丘に向つて群集する。あたかも一基の磁石に鐵屑が吸寄せられる様。

今集りつゝある者のみでも三千や五千では無い、まだ續々城門から出て來るに違ひない。野戰に於てかゝる多數の投降を獲ることは未聞の快事。而も此の丘に立つて全幅の光景を眼下に瞰る事を得るのは何等の愉快ぞ。

吟詠に上つたのであるを、今日唯今此の滿洲の眞中に来て、渾河の氷を踏破するとは何たる果報ぞ。いでや後日の話の種に氷を一つ噛んでみようかと、底の砂の見える極めて浅い處に立止り、劍の鎧で突きこはす。さて取上げたる玲瓏の一塊、がりゝとやれば、別に何のかはりも無い氷の味、冷絶舌を刺すばかり。

右岸に達した。岸に沿うて一連の塹壕がある。夥しい彈藥、食器、水筒、靴帽子、外套、其の外種々雜多の物が散亂して居る。餘程周章て、敵は退却したものと見える。處々に更紗の襦袢が脱ぎ棄てゝある、血が染んで居る。併し此の邊には委棄したる敵の屍骸は一も見當らぬ。段々進むと、軍

ぜられる。ひた走りに走り出したが、百米と行かぬ中にもう呼吸が迫つて一步も歩かれぬ。羨ましい。某に某はとつと、吾を通り越して先に行つて仕舞ふ。

仕方が無さに立止つて見る。と敵の委棄していつた麥粉の俵が散亂して居る。是幸ひとこれを楯にべつたりと坐つて喘ぎく呼吸を休め、水筒に口を着けて見たが、生憎一滴も無い。

今少し遠くに行つて見ようか。併し吾が脚では五町とは走られぬ。直様敵に追付かれるは必定。此處に一人居た處で仕方がない。何としようかと考へながら、豫て韜走りを防ぐため縛つてあつた佩劍の紐を解く。あゝ残念、捕虜に

なるよりは寧ろ腹を切らう。

銃聲は益、劇しい。日は暮れかゝる。此處で流丸に當つて一人で犬死をするのは愚の極だと考へつゝ、頭を擡げて見廻すと、つい近處に一中隊許の歩兵が畠の畔に據つて伏して居る。さうだ、彼の中に雜つてやらうと分別を定め、屈めるだけ腰を屈めて行く中にも、飛丸身を掠めて幾度か膽をひやす。漸く辿り着いて見れば、地面に伏して折重なつて射撃をして居る歩兵。予は其の間に挟まつて、板になれ紙になれと體を平たくして匍匐ふ。

劉曉たる喇叭が鳴り渡る。「打方止め」と右の方五六間に伏して居た一將校が號令する。頭を舉げて舊位置の方を窺

へば、ほゞ銃聲が收つた。「はてな、逆襲では無かつたかな。何かの間違で、一時打合つたまでかな。さうだらう、それに違ひない。我が司令部にこそ兵力は無いが、右の丘にも左の山にもあの通り無数の味方が居るのだもの、如何に死物狂ひとは言へ、逆襲が出来るものでは無い。やはり降参に相違ないのだと思ふ中、「そら来た、敵が右の方に」と怒鳴る者がある。成程五六十の露兵が何か奇聲を發して遣つて来る。併し三々五々ぶらりくと手を上下し、何も武器は携へて居ない。「打て〜。」と予の横の兵が言ふ。「遣れ〜。」と背後の兵が和する。二三發響く。「打つな、止めえ。打方止めが鳴つたぢや無いか。」と予は生意氣に左右を制して居る。

程なく再び「打方止め」の喇叭が響いた。(故郷他郷)

白石千別
歌人
明治二十年歿

二七 月雪花

山 柿 の 實 の たゞ一つ
残る 軒 端 に、また一つ
見るもの得たり、此の朝け
柳にかゝる 三日の月。(白石千別)

足代弘訓
國學者
歌人
安政四年(二五六)
歿
年七十三

園 生 の 竹 の 下 折 れ の
音 ぞ を り〜 聞 ゆ な る。
降るとしもなく 降る雪の、

頼山陽
漢學者
天保三年(二四三)
歿
年五十三

いかに夜深く 積るらん。(足代弘訓)
花より明くる み吉野の
春のあけぼの 見わたせば、
もろこし人も 高麗人も、
やまと心に なりぬべし。(頼山陽)

相馬御風

名ハ昌治
文學者
明治十六年生

二八 春待つ心

相馬 御風

六七尺も積つてみた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた。解けた雪は解けるあとから殆ど全く人間に氣付かれずに、或は蒸發し或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つ

筆蹟

しかし災難に逢
時節には災難に
逢がよく死ぬ時
節には死ぬかよ
く候是はこれ災
難をのがるゝ妙
法にて候かしこ
良寛

エッーい災難を
時節に災難に逢
よく死ぬ時節に
死ぬかよ候是は
これ災難をのが
るゝ妙法にて候
かしこ良寛

いかに

て、どうして無くなつたか
解らぬやうに無くなつて
しまつた。

良 幾月かの永い間、深い雪の
中に閉ぢこめられてみた
寛 北國の子供等が、久しぶり
筆 で黒い大地の面を見出し
蹟 た時に歡ぶ有様は、全く言
ひ表はしやうのないもの
である。まだかなり深く
消え残つてゐる雪の處々

に黒く濕つた土が覗きはじめると、子供等は申し合せた如くつぎ／＼にそこへ集つて行く。そして殆ど躍り出さんばかりの嬉しさうな様子で、土を踏廻る。田や畑の處々に見え出した黒土の斑點には、鷗や鴉や雀が先づ群をなして集る。彼等の上にもいき／＼した歡が輝いて見える。

むらぎもの心たのしも、春の日に

鳥のむらがりあそぶを見れば。

良寛
越後ノ人天保二
年七十五

かく
かう良寛が歌つた心もちも、雪國に住んだ者でなければ深い味は分らんくらゐであらう。

「長々の月日、雪の下にしにのびたる落蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風の時を得て雪間々々をうれしげに首さしの

べて」

と一茶が書いた若草の歡も雪國に住む者のしみじみと味ひ得ることである。大地を踏歩く人の足音の久しく聞えなかつたのを靜かな夜にふつと聞きつけた時の一種微妙な懐かしみと歡、そんな心の經驗も雪國に住めばこそ味はへるのである。

一茶
信濃ノ俳人
文政十年(西七七)
歿
年六十五

筆蹟

十五夜もたゝの
山一秋の雨
おとる夜やさそ
ひ出さるゝ庵の
笠
玉になる欲はあ
る一門の露
一茶

良夜嬉々
十五夜もたゝの
山一秋の雨
おとる夜やさそ
ひ出さるゝ庵の
笠
玉になる欲はあ
る一門の露
一茶

あづさ弓春になりなば草の庵を

とく訪ひてまし逢ひたきものを。

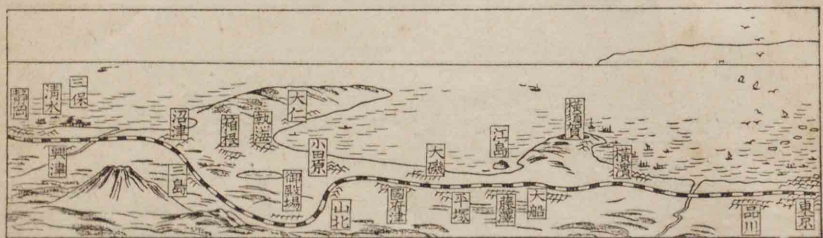
かうした人間味の極致を示したやうな秀歌の良寛にあつたことも、北國の冬と云ふことを全然頭に入れないでは、なかなか理解されまいと思ふ。

全く北國の住民の春を待つ心には、生そのものゝ味の測り知れない深さが窺はれるのである。(樹かげ)

二九 千里の春 その一

大和田建樹

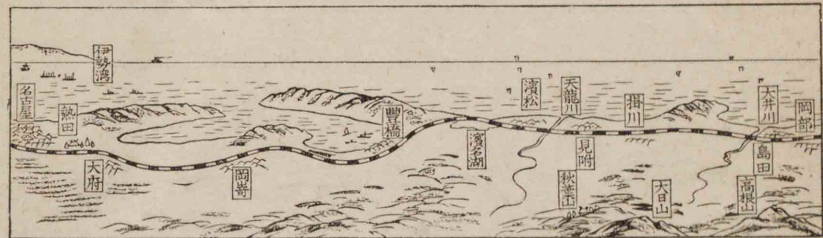
山青く浦霞む。千里みな春なり。此の間に一線を曳くものは何ぞ。 一列の汽車、今や東京より東海道を下りゆくな



り。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、抑、畫か。七砲臺邊波穩にして、群れ飛ぶ鷗、落花の風に飄るに似たり。帆を半ば張りて出でゆく船あり、櫓をあやつりて横ざる舟あり。房、總二州の山々は霞に消えて視れども見えず。

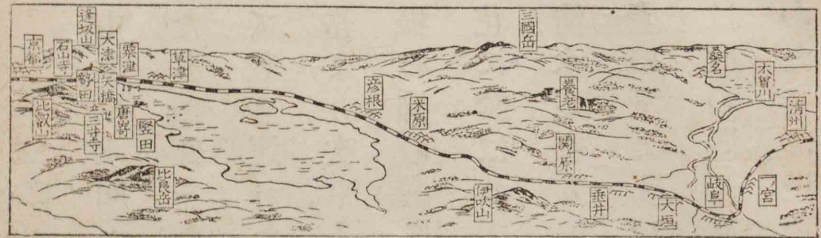
松青きところ、桃の花紅なり。藤澤の野、山北の谷、人ごとに唯美しと呼ぶ。

三保の松原煙り渡りて、春は畫の如し。磯に碎けて折れ返る波、波路の末に浮き立つ



雲、何物か造化の妙筆に漏れん。近き舟は
行けども、遠き帆影は動かんともせず。杳
としてほのみゆるは伊豆なるべし。富士
は水彩をもて作れる畫の如く、窓の右に立
ち、又左にあらはる。

三尾の平原、麥は綠に、菜の花は黄なり。熱
田の社を左に見て、春風に吹かれゆけば、名
古屋の城はまがはぬ影を見せたり。田夫
は金の鯢を背にして妻と語り、行商は旅宿
の可否を評して我が好む方へと人をすゝ
む。彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川



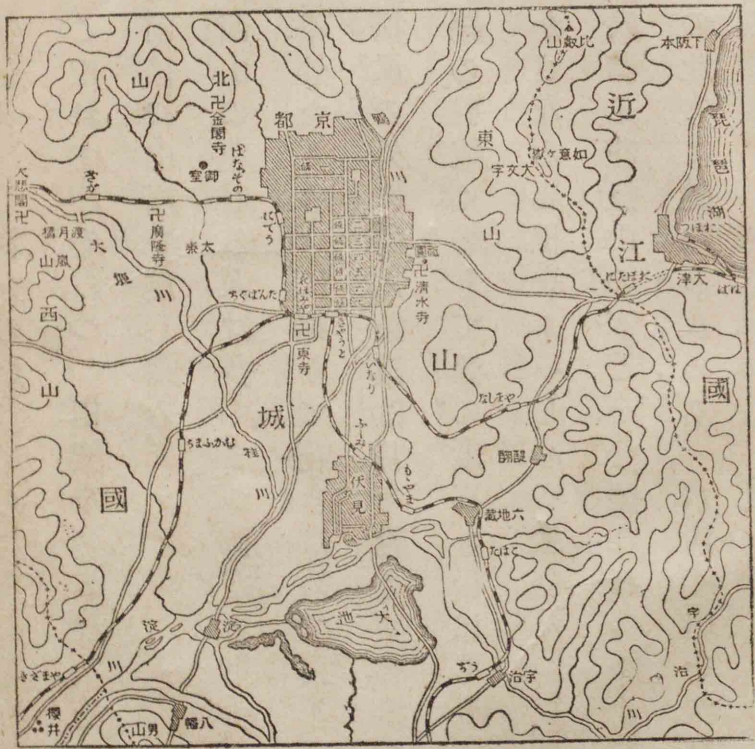
に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將
軍の遺跡はそもいづれのところぞ。問へ
ども答へず。霞にたゞまるゝ、遠近の山影、
あるひは淡く、あるひは濃く、鳩の浦風、波に
眠りて、栗津の松原、ひとり昔をかたりがほ
なり。
東寺の塔は我を待ちて立ち、鴨川の水は我
を迎へて歌ふ。慕はしき母にあひ、なつか
しき父と語るに似たるは、京都に着きたる
ときの心地なり。

三〇 千里の春その二

大和田建樹

山紫に、水明かなるところ、夢のごとく、現のごとく、三條をわたり、四條をわたること、日に幾度ぞ。躑躅を柴に折り添へて戴き連れたる大原女も、いつしか我が友となれり。如意岳より吹來る春風は軽く我が袖をはらひて、行くへは遙に堤の柳の糸にあり。

花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る客けふも清水觀音堂の前をみたしぬ。舞臺の上より見おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、あたかも一幅の四條畫なるに、姥は此の間に立ちて「蕨餅召せ」など呼ぶ。しばし憩ひて、眺めわたせば、淺黄に、藍に、霞み渡れる八幡山崎のあたりもゆか



京都市附近地圖

しきに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ面白けれ。燈火の影は水に映りて、星の如く、花の如し。夜櫻看んとて、祇園へ向ふ。一本の老木は

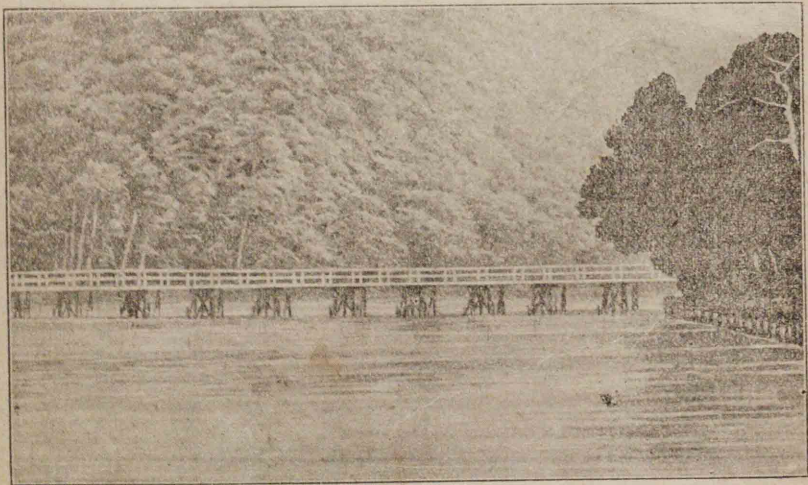
枝を垂れて篝火の焰に覆られ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれて顔を打つ。田樂を賣る聲、茶を勧むる聲、この花の前後に山彦を反し來る。

西山の花看る人は、多くまづ御室を指す。松緑に、樓門赤く、茶煙たえふゝに颯りて、花きはめて白し。塔は霞を漏れて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯の歌高き梢にあり。

かさなる岩根をふみしめて生ひたつ松、その間を點綴して咲誇る花、嵐山の春こそ今酣なれ。小舟漕ぎゆく人あり、岸の此方に眺むる人あり。水清く岩を洗ひて玉と碎け、山白く煙を離れて空にかゝよふところ、此の美は彼の美と相映

柳櫻
見渡せば柳櫻を
こきまぜて都ぞ
春の錦なりける

じて自然の彩色をなす。坂を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげらるゝ一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、さながら西陣を織出せるが如く、又友禪を染めなせるが如し。途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。茶店あれども客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、



渡月橋か嵐山を見

兒童は門の仁王に紙礫を打ちつけて去る。
 暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうく鴨川に襲ひ來れり。
 清水の堂も半ば隠れぬ、大文字も姿を隠しぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見るくいろどられゆく山影、淡く、濃く、青く、黒く消え行く人影、いづれ詩中のものならぬはなし。天地ただ平和、四圍たゞ寂寞。かへりみれば西山もなく、北山もあらず。(雪月花)

中國文教科書卷二終

中國文教科書 全十册

教育部省檢定 大正二十一年十一月十六日 中國國語教科書

大正二十一年十一月十六日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行
大正二十一年十一月十六日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行
大正二十一年十一月十六日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行	明治三十九年十一月十五日發行

卷一・二各金拾七錢	定價	大正十臨時定價
卷三・四各金拾六錢	定價	大正十臨時定價
卷五・六各金拾五錢	定價	大正十臨時定價
卷七・八各金拾四錢	定價	大正十臨時定價
卷九・十各金拾三錢	定價	大正十臨時定價



編者 吉田彌平
 東京市小石川區高田老松町五十二番地

發行者 上原才一郎
 東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店
 東京市神田區通神保町六番地
 (電話) 神田三〇八七番
 (振替) 口座東京三二七番

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御申越被下候はゞ直ちに御送附可致候

尾崎七三郎第二中学校

方田順子

J. TAKATA



高田 恒之 蔵

J. Takata

高田 恒之

恒之

広島大学図書

2000071955